

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XII - 9

1985

滋賀県教育委員会

財団 滋賀県文化財保護協会

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XII-9

1985

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県下の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、ほ場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加し今年度は36遺跡を数えることになりました。

ここに、実施しました発掘調査の報告書を刊行し、広く埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助にしたいと存じます。

なお、今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました25遺跡を9分冊に分けて刊行するものであります。

最後になりましたが、ほ場整備に伴う発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申しあげますとともに、この報告書の刊行にご協力いただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

市 原 浩

## 例　　言

1. 本書は、昭和59年度県営土場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査結果の報告書である。
2. 調査は、滋賀県農林部耕地建設課の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに、財団法人・滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 本書には、野洲郡中主町五条遺跡、虫生遺跡、八夫遺跡の調査結果を収載した。
4. 現地調査や整理作業等に御協力を頂いた調査員、補助員等の関係者は各本文中に記載した。
5. 調査、整理及び報告は、滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課主査近藤滋・技師木戸雅寿が担当し、現地調査、報告書執筆については嘱託調査員岩間信幸と調査員稻垣正宏が当った。

# 目 次

## 第1章 五条遺跡

1. はじめに.....	1
2. 位置と環境.....	2
3. 調査.....	3
4. 遺物.....	8
5. むすび.....	14

(図版)

## 第2章 虫生遺跡

1. はじめに.....	15
2. 位置と環境.....	16
3. 調査.....	17
4. 遺物.....	18
5. むすび.....	19

(図版)

## 第3章 八夫遺跡

1. はじめに.....	23
2. 位置と環境.....	24
3. 調査.....	25
4. 遺物.....	26
5. むすび.....	27

(図版)

# 図版目次

## 第1章 五条遺跡

図版一	調査風景・調査区遠景	図版九	遺物
二	調査区遠景	十	遺物
三	(上) Tr 33断面 (下) Tr 37断面	十一	遺物
四	(上) Tr 42断面 (下) Tr 56断面	十二	遺物
五	(上) Tr 310断面 (下) Tr 313断面	十三	遺物
六	遺物	十四	遺物
七	遺物	十五	遺物実測図
八	遺物	十六	遺物実測図

## 第2章 虫生遺跡

図版一	調査風景・調査区遠景	図版六	(上) Tr 86断面 (下) Tr 98断面
二	調査区遠景	七	(上) Tr 106断面 (下) Tr 113断面
三	(上) Tr 101断面 (下) Tr 37断面	八	(上) Tr 129断面 (下) Tr 138断面
四	(上) Tr 46断面 (下) Tr 50断面	九	(上) Tr 145断面 (下) Tr 165断面
五	(上) Tr 66断面 (下) Tr 67断面	十	遺物写真および実測図

## 第3章 八夫遺跡

図版一	調査風景	図版五	(上) Tr 59断面 (下) Tr 104断面
二	調査風景・調査区遠景	六	(上) Tr 108断面 (下) Tr 115断面
三	調査区遠景	七	(上) Tr 119断面 (下) 調査区近景 (北東から)
四	(上) Tr 6断面 (下) Tr 47断面	八	遺物

## 挿図目次

### 第1章 五条遺跡

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡全体図（その1）	3
第3図 遺跡全体図（その2）	3
第4図 柱状土層図	3

### 第2章 虫生遺跡

第1図 遺跡位置図	14
第2図 遺跡全体図	15
第3図 柱状土層図	15

### 第3章 八夫遺跡

第1図 遺跡位置図	18
第2図 遺跡全体図（その1）	19
第3図 遺跡全体図（その2）	19
第4図 柱状土層図	19

# 第1章 五条遺跡

## 1 はじめに

本報告は野洲郡中主町における県営ほ場整備事業・暗渠排水路敷設工事に伴い、昭和59年度に実施された五条遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。因みに中主町における当事業は、ほかに虫生、八夫、木部を対象とし、予定工事の総面積約115ヘクタールに対して敷設する暗渠排水路約1200個所におよぶ規模である。

今回の五条工区となる工事対象地は、五条集落の西南部を除いてはほぼ完全に当集落をとり囲んだかたちになり、北は野田集落の南端、南は六条集落東部に接し、さらに吉地集落の北に接する約32ヘクタールの予定工事面積で、敷設暗渠排水路は約400個所となっている。

調査は滋賀県教育委員会文化財保護課主査近藤滋・技師木戸雅寿が担当し、現地調査は財團法人滋賀県文化財保護協会嘱託岩間信幸が担当した。調査期間は昭和59年12月から昭和60年2月までである。現地では、北川茂氏以下多数の方々に作業人夫として協力を得、調査員に稻垣正宏、また以下に調査補助員として各氏の参加があった。

井上誠 奥村一彦 西村久史 小林義幸 大西歎 上田康之 前田康史 政岡伸洋（順不同）

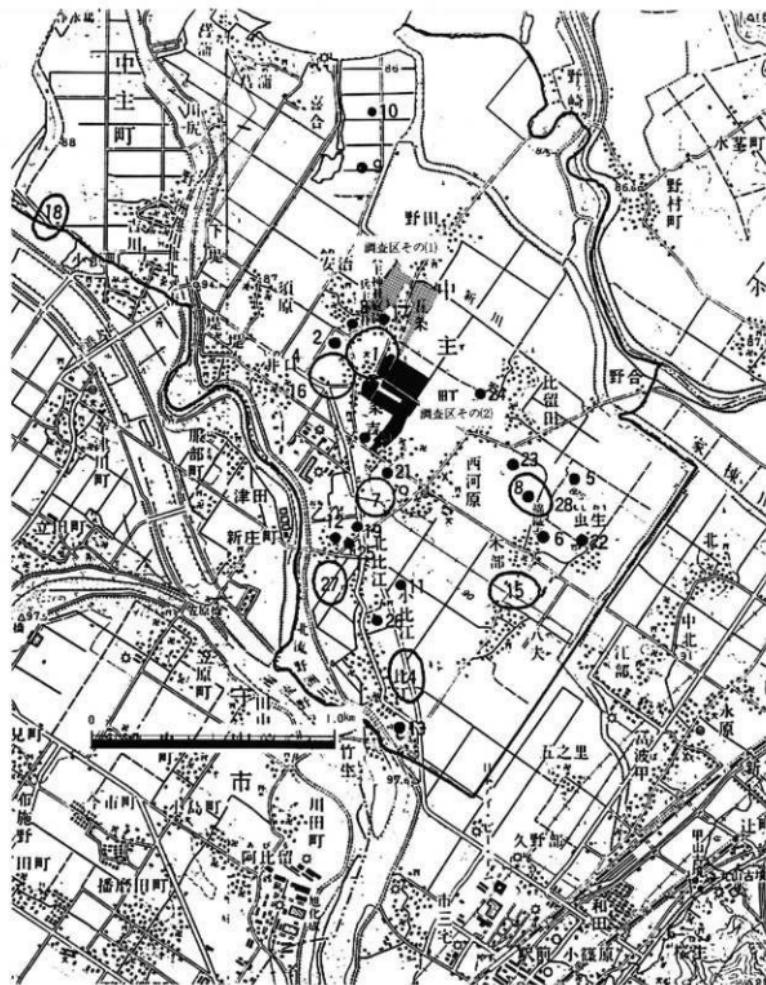
本書の作成にあたっては全般にわたって稻垣正宏の協力があり、とくに「4.遺物」の項の文責を負ってもらつたが、それ以外は岩間信幸の文責である。

尚、調査中は関係諸機関ならびに地元の方々に御協力・御理解をいただいたことを末筆ながら記して謝意を表わしたい。

## 2 位置と環境

五条遺跡は野洲郡中主町大字五条に所在する。琵琶湖最東部東部に注ぐ野洲川と日野川が造る沖積地にある中主町にあっては、ほぼ中央河口寄りに位置する。集落南部には養老2年（718）の創建と伝える式内社の兵主神社が鎮座する。近年の発掘調査によってこの沖積平野における埋蔵文化財の全容があきらかにされつつあるが、五条においても南接する六条とともにその調査成果にとくに著しいものがある。第5次に重なる調査によって古墳時代中期からの遺跡が確認されていたが、昭和57年から59年にかけての県道工事に伴う調査では、弥生時代から古墳時代前期の遺構が確認されるに至った。<sup>注1</sup>とくに県道六条・野洲線では中期の円墳が検出され、周濠内より、円筒埴輪・形象埴輪の出土が伝えられている。

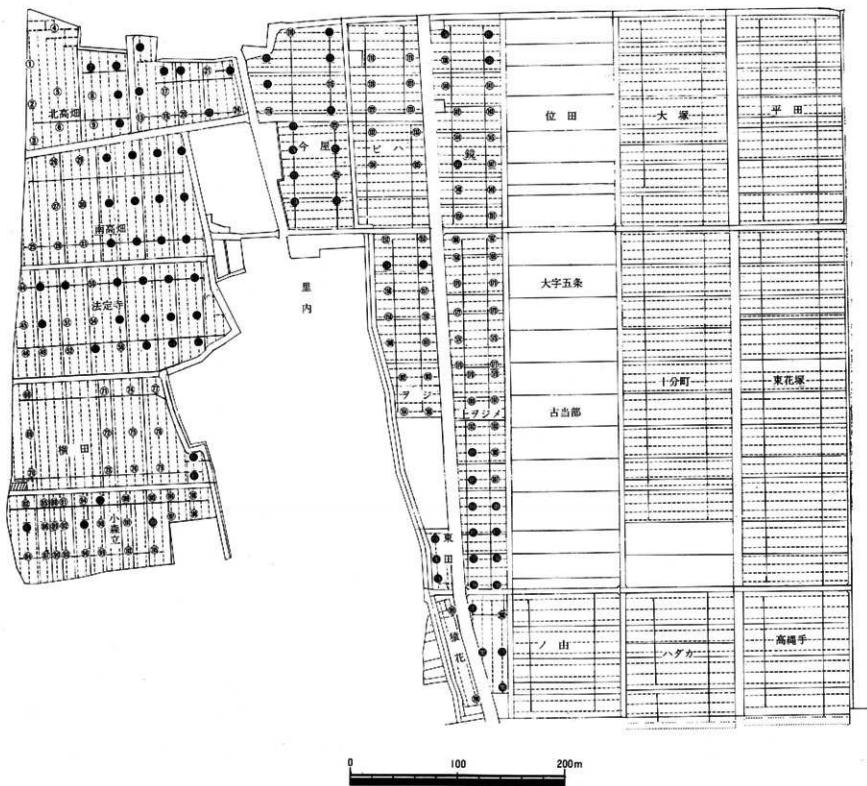
むろん、奈良・平安時代以降の遺跡もそれらとともに発見されており、古代条里制の遺名を伝える五条・六条の地が兵主神社周辺一帯に高密度の複合遺跡の様相を呈していることがうかがえる。今回のように、ほ場整備などの大規模な公共事業に伴う広範囲の現田畠下の調査は、古代以来の集落の変遷を知る上できわめて興味深いものといえる。ただ、より良好な集落遺跡がそのまま現集落下に埋没している可能性を考えると、五条遺跡の全容の解明は、近年の急激な調査件数にもかかわらず、その一途を示したにすぎず、小範囲ながらも地道な調査のつみ重ねにゆだねるべきであろう。



- |         |          |           |            |
|---------|----------|-----------|------------|
| 1 条道跡   | 8 木部道跡   | 15 木部道跡   | 22 虫生地道跡   |
| 2 法光寺道跡 | 9 野田新川道跡 | 16 六条道跡   | 23 霧坂道跡    |
| 3 大日堂道跡 | 10 野田沼道跡 | 17 兵主道跡   | 24 青地城道跡   |
| 4 乗部堂道跡 | 11 小比江道跡 | 18 吉川南道跡  | 25 鹿部屋敷道跡  |
| 5 天神山道跡 | 12 佐性寺道跡 | 19 弁慶堂道跡  | 26 雄古屋敷道跡  |
| 6 錦織寺道跡 | 13 比江南道跡 | 20 吉地大寺道跡 | 27 乙密道跡    |
| 7 光明寺道跡 | 14 比江道跡  | 21 賢征坊道跡  | 28 木部天神前道跡 |

第1図 遺跡位置図

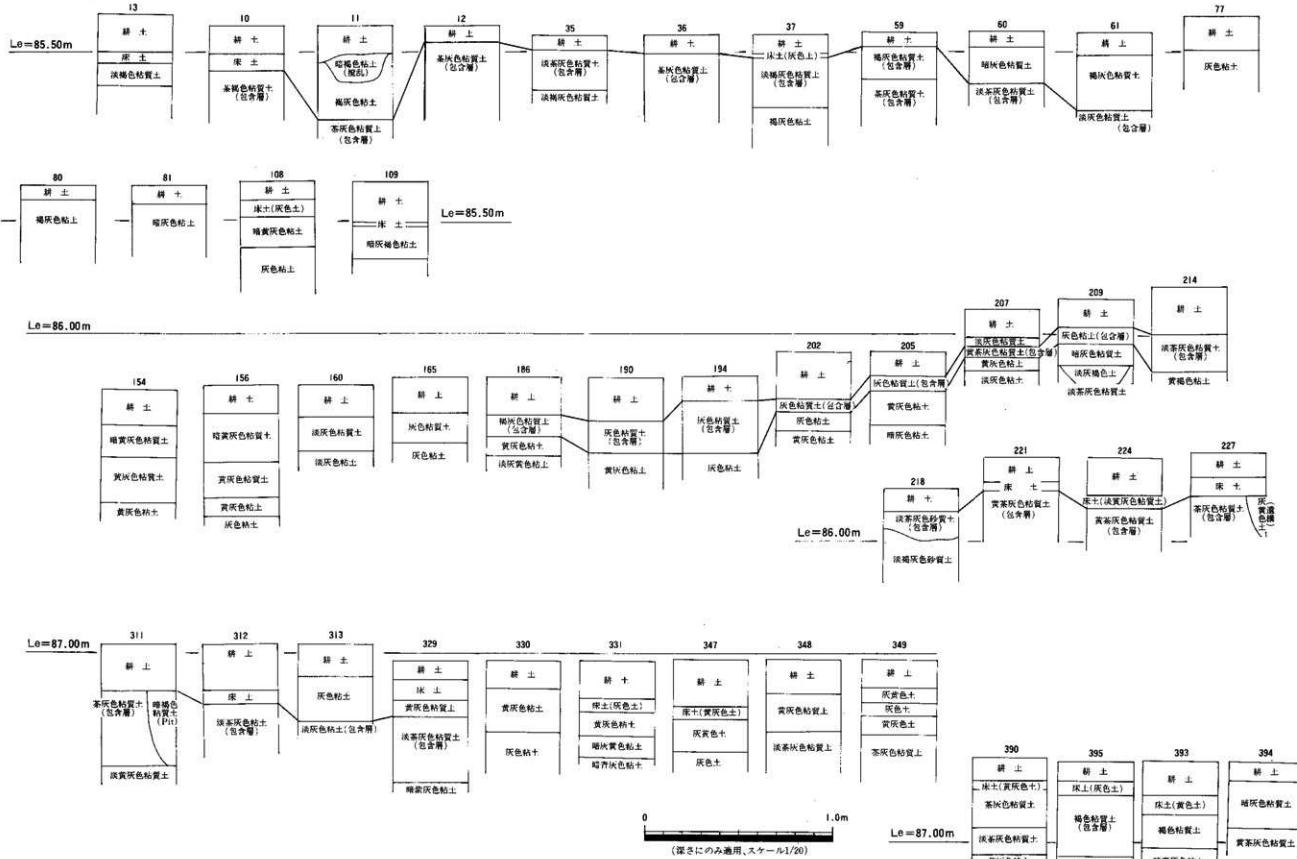
○ 無遺物  
● 遺物出土



第2図 遺跡全体図その(1)



第3図 遺跡全体図その(2)



#### 第4図 柱状土層図

### 3 調査

#### (1) 方 法

上述の工事規模に対応すべく、できるかぎりの広範囲の遺跡の状況を早急に把握する必要から、調査は暗渠排水路敷設予定地点1箇所につき、上・中・下の3箇所(各幅1m×長さ3m)のトレンチを入れることとした。掘削はバケットに鉄板をはかせたバックフォーで行うこととし、層序に配慮しつつ、包含層の遺物は遺構の検出面まで下げて取りあげた。遺構のないかぎり、工事レベル深度まで掘削することを原則とし、配置トレンチのピッチについては、土地所有者への均等な配慮から、区画整理済みの田園1枚につき1箇所(トレンチ3個)があるいは敷設排水路3本につき1本という原則で進めていった。掘削後は断面および掘削終了平面の清掃を行ない、記述と断面写真による記録化をはかった。調査は本数149本、トレンチ393個となった。

#### (2) 調査経過及び層序

調査の結果、遺物および遺構は現集落に密接した地帯に濃厚に分布することが判明した。県道六条・野洲線以南の調査区では、工区最南端で古地集落北西部にあたるTr 389～393で耕土下に茶灰色粘質土の遺物包含層を検出した。遺物の出土量は少ないが、集落際で包含層が薄くとされる地点があり、包含層は北西へさらにのびる可能性がある。北西には周知の吉地大寺遺跡がある。六条集落東側では耕土下に黄灰色土・茶灰色土の2層の遺物包含層を確認したが、ピット状の遺構が両層に切り込んでいた。包含層はTr 322・325・328を東限にして消滅するが、さらに東方のTr 335～347地点に遺物の出土がみられるものの、明確な包含層を形成せず、遺物も少片であった。

県道六条・野洲線以北では、六条集落東側の遺物包含層が北にのび、五条集落の南端につながる様相を呈する。この地点では遺物出土量がきわめて多く、良質な大形片も多くなる。明確な遺物包含層である茶灰色粘質土層は北上するにつれて消滅するか、ないしはやや灰色ぎみの粘質土層に移行していくようであるが、Tr 156地点では遺物出土量がきわめて減少する。ただ同トレンチで直下の灰色粘土層より、古墳時代後期の遺物が出土していることから、以下に古墳時代の遺構が想定できる。

五条集落北部には野田集落へつながる様相で遺物包含層が確認できた。とくに北から北西を周る地点では質・量ともに良好な遺物が出土しており、次節で詳説する。

遺構については、トレンチの規模、早急な遺跡範囲の確認という調査方針上の理由などから精査には至らなかつたが、北西区では遺物包含層を切ってピットが多く検出されており、出土する中世遺物と同時期に比定される可能性が高く、中世村落を解明する上での重要な集落跡が包蔵されていることは確実であり、後の綿密な調査に期待したい。

### 4 遺 物

遺物は兵主大社の周辺を中心に出土している。いずれも包含層出土のものである。それらは年代と器種を分別すると、6、7世紀の土師器(甕、高环)、須恵器(环蓋、环身、高环)。8世紀代の須恵器(环蓋、环身、甕)、

平安時代の縁釉陶器（壇、小环）。鎌倉、室町時代の黒色土器（壇）、土師質小皿。室町末期の美濃天目茶碗。江戸時代初期の九州産京焼風陶器（壇）<sup>図版</sup>が出土している。これらについては、反転復元した口径または高台径、底径が信頼できるに足る残存率を持つもの（概ね10%以上）を実測し、残存率が低いもの、口縁、高台の端部が欠損しているものについては写真図版にのみ載せた。

以下、実測番号順に個別に述べてみたい。

#### 須恵器

図版十五-1（写真図版八-1、十环蓋）は須恵器壺蓋である。Tr 56から出土したものである。口径13.2cm、器高4.2cmである。やや平たい天井部で、天井部縁辺の稜はまったく退化してなくなっている。口縁端部は内傾する凹面をなす。内面にロクロ成形の痕が残り、天井部外面には切離し痕がある。胎土は砂粒を少々含むが緻密であり焼成は良好である。外面は灰色、外面の一部と断面、内面はにぶい茶色を呈す。

2（写真八-4）は、須恵器壺身である。Tr 59から出土したものである。口径12cm、器高は3.3cmである。壺身は浅く、タチアカリも低い、受部は外上方へ伸びる。底部に切離し痕が残る。外面にロクロ成形の痕が残り凸凹しているが、内面はていねいにナデられなめらかである。胎土は砂粒を少々含むが密であり、焼成は良好である。色調は灰色であるが、内面に一部黒色物が付着している。

3（写真八-3、十五环身）は、須恵器壺身である。Tr 37からの出土である。口径は8.2cm、器高は3.4cmで小型品である。厚手で口縁はゆがんでおり粗雑なつくりである。タチアカリは低く、受部は外上方に伸びる。底部に切離し痕がある。内面にはロクロ成形の痕が残る。胎土は砂粒を少々含むが密であり、焼成は良好である。色調は内外面は暗灰色であるが、外面は焼成時に灰をかぶっており、白色小斑点が多く付着している。断面はにぶい赤色である。

4（写真八-6）は、Tr 156から出土した短脚高壺の脚部であり、下端は欠損している。内外面ともていねいなナデにより仕上げられている。胎土は砂粒、ウンモを含むが密である。焼成はやや悪く、軟い。全体に磨耗しており、色調は淡灰色である。

5（写真八-5）は、Tr 56から出土した須恵器長脚二段透し高壺である。脚部は細長く、方型の透しが、対称する位置に二箇所、二段ずつ開けられている。透しの上段と下段の間には、二条の四線が入れられる。下端は欠損している。内外面ともていねいにナデで仕上げられている。胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は灰色であるが、外面は焼成時に灰をかぶっており、白色の小斑点が多くみられる。断面はにぶい赤色を呈す。

6（写真十一-11）は、Tr 16から出土した須恵器壺Bの底部である。高台は底部の縁辺より内方にあり下端が開いている。高台径は6.5cmである。外面はていねいにナデで仕上げられているが、内面底部はロクロ成形の痕が残る。胎土は砂粒を少々含むが密である。焼成は良好で色調は暗灰色を呈する。

7（写真十一-9）は、Tr 83から出土した須恵器壺Bの底部である。高台は底部の縁辺より内方にあり、高台径は8.6cmである。高台は外方へややふんばっており、外縁の一点で接地する。内外面ともていねいにナデで仕上げられている。胎土は白色砂粒、黒色砂粒を含むが密である。焼成は良好で、色調は内外面が淡灰色、断面が暗灰色である。

8（写真十一-14）は、Tr 83から出土した須恵器壺Aの底部である。底部は平坦で中央がやや凸状になる。底径は、11cmである。底部外面、口縁内外面はていねいにナデで仕上げられるが、底部内面にはロクロ成形の痕が残る。胎土は砂粒を含むが密で、焼成は良好である。色調は灰色である。

9（写真十一-6）は、Tr 83から出土した須恵器壺蓋である。口径は17.2cmである。口縁端部は、下方に折

り曲げられ外側に狭い凹面をつくる。天井部はやや盛上り、中央部にはつまみが付くものと思われるが、天井部中央は欠損している。内外面ともていねいにナデで仕上げられている。胎土は砂粒やウンモを多く含み、やや粗い。焼成は不良で軟く、内外面とも磨耗している。色調は淡灰色である。

10は、須恵質の灰釉陶器の环の口縁である。Tr 14から出土したもので口径は13.8cmである。口縁端部は強いヨコナデにより小さく外反している。内外面ともていねいにナデ調整した後、薄い透明釉がかけられているが、口縁端部は意図的に釉をはいだ、いわゆる口禿になっている。胎土は、黒色、白色砂粒を含むが密である。焼成は良好である。色調は釉は透明に近い薄緑色、素地は淡灰色である。

11（写真十一-3）は、Tr 155から出土した須恵質の灰釉环である。口縁端部は強いナデにより小さく外反する。口径は18.5cmである。内外面には、やや厚く施釉されるが箇所かはがれています。口縁端部は10と違って製作時には施釉されている。胎土は緻密であり、焼成は良好である。色調は釉は薄緑色、素地は淡灰色を呈する。<sup>25</sup>

以上の須恵器の年代だが、1、2は中村浩氏の陶器編年ではII型式5段階、3はII型式6段階。高环はII型式1～5段階のものである。

8、7の須恵器环Bは、平城宮の編年では高台の退化などからみてIV期～VI期のものと考えられる。

灰釉陶器は10は10世紀中頃～後半、11は10世紀前半のものである。

土師器、綠釉陶器、黒色土器、陶磁器

図版十六-1（写真六-4）は土師器變口縁である。Tr 40から出土したものである。頭部の屈曲はゆるやかで、口縁部は直線的に上方方に伸びる。端部の断面は丸い。口径は21.4cmである。全体にナデ調整される。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。焼成は不良で軟く、全体に磨耗著しい。色調は明るい黄橙色である。体部以下は欠損しているが口縁の形態から、造付け、または移動式のカマドとセットになる長胴の甕であることがわかる。

2（写真七-14）は土師器高环の脚环接合部で、Tr 59から出土したものである。脚部の接合は、環底部外面中央に脚部の上端面をあて、まわり（接合部外面）に粘土を厚く巻く方法でおこなわれている。ナデ調整で仕上げられる。胎土はウンモ、砂粒、黑色粒子、クサリレキを含み、やや粗い。焼成は不良でやわらかく、全体に磨耗している。色調は、内外面が明るい黄橙色で断面は橙色である。

3（写真七-13）は土師器高环である。Tr 40から出土したものである。脚部は大きくラッパ状に拡き、端部近くで短い裾部が、さらに外方へ伸びている。脚部は3以上は中空ではない。裾端部はやや尖っており、底径は9.2cmを測る。外面はていねいなナデ調整が施され、内面は成形時のシボリ目の痕がないことから横方向にヘラケズリしてシボリ目を消したものであろうが、磨耗のため判然としない。胎土は、ウンモ、白色砂粒などを含むが密である。焼成は不良でやわらかい。色調は明るい黄橙色を呈する。

4（写真十一-1）は土師質の綠釉陶器の小环である。Tr 113から出土したものである。口縁端部は小さく外反している。綠釉が内外面にかけられている。胎土は密で、色調は釉は緑色、断面はにぶい橙色。焼成は良好である。

5（写真十一-2）は、土師質の綠釉陶器塊で、Tr 23から出土したものである。底部は平坦で、口縁部は垂直に立上っており、筒形をした塊と考えられる。高台径は6.0cmである。高台は貼付けで底部縁辺よりかなり内側に付けられ、断面は三角である。綠釉はほとんど剥げ落ちているが、底部内外面、口縁部外面、高台内にわずかに残っている。胎土は砂粒、ウンモ、クサリレキ、黑色粒子を含み、やや粗い。焼成は良好だが、素地がやわらかいのか、全体に磨耗している。色調は釉は黄緑色、素地は明るい橙色だが、高台部のみは明るい黄橙色を呈する。

6（写真十三-2）は中国製青磁壺であり、Tr 19から出土している。口縁は端部近くで外反する（端返子）形態である。口径は11.0cmである。厚手の器壁である。成形はロクロ成形で、外面にヘラにより退化した蓮弁文が刻まれる。釉は厚くかけられる。胎土は密で灰色を呈する。素地は鉄分を多く含む。釉の発色は悪く薄緑色を呈する。

7（写真十二-2）は黒色土器壺の底部である。Tr 146から出土している。高台は貼付けで、大きく外方へふんばっており、角形で、しっかりしたつくりである。高台径は5.3cmである。疊付は平坦面をなしている。底部内面中央に凹線による小円圏がある。ナデ調整により仕上げられている。内外面とも炭素の吸着はみられず、おそらく後次的に火を帯びることにより炭素が飛んだものとみられる。胎土は、砂粒、ウンモ、クサリレキを含み、やや粗い。焼成は良好である。色調は明るい黄色を呈する。

8（写真十二-1）は、黒色土器壺の底部である。Tr 136から出土している。底部は7に比べて丸く高台も低い。高台は貼付けで外方へふんばっており、高台径は8.3cmである。7に比べて疊付は凸状をなし、全体に丸い印象をうける。ナデ調整により仕上げられている。内面に炭素の吸着が見られる。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は内外断面は、にぶく薄い黄色を呈し、炭素が吸着した部分は、暗灰色を呈する。

9（写真十二-3）は黒色土器壺の底部である。Tr 23から出土したものである。高台は貼付けで外方へふんばっている。高台径は4.9cmである。高台は疊付も丸く、全体に丸い印象を受けるが、底部が平坦なので8よりも高く見える。全体にナデ調整されて仕上げられる。内面に炭素が吸着しているが、8に比べてよく胎土に浸透していないので、部分的に発している箇所がある。胎土はよく水さらしされ、砂粒など不純物を含まず、精良であるが微細なウンモを含む。焼成は良好である。色調は内外断面がにぶい橙色で炭素吸着部分は、暗灰色を呈する。

10（写真十二-5）は黒色土器壺底部で高台形は5.6cmである。高台は貼付けで、疊付の内縁で接地する。ナデ調整で仕上げられる。内面に炭素が吸着するが、胎土にわずかしか浸透していないので、ほとんど剥げ落ちて痕跡が残るのみである。胎土はクサリレキを含むが精良であり、焼成は良好である。色調は外断面は、にぶい黄色を呈するが、炭素吸着部は灰色を呈する。

11（写真十一-6）は土師質小皿である。Tr 95から出土したものである。底部はやや丸く、口縁は外反気味に伸び、伸び、端部はつまみ上げられる。いわゆる「ての字状口縁」を呈する。口径は8.8cm、器高は1.0cmである。内面と口縁外面はナデ調整されるが、底部は未調整である。全体に消耗著しい。胎土は砂粒を少々含むが密である。焼成は不良でやわらかい。色調は内外面は、にぶい黄色を呈するが、断面の一部は淡灰色である。

12（写真十一-8）は土師質小皿である。Tr 16から出土したものである。やや深手の器形で、口縁は成形時に強くヨコナデされて外反する。口縁端部はやや尖っている。口径は10.2cm、器高は1.8cmである。内外面ともにいねいなナデ調整により仕上げられる。胎土は砂粒を少々含むが密である。焼成は良好である。色調は、内外面にはにぶい黄橙色、断面は橙色を呈する。

13（写真十一-12）は土師質小皿である。Tr 124から出土したものである。口縁は成形時のヨコナデによりやや外反している。端部はやや尖っている。口径は9.7cm、器高は1.6cmである。内面と口縁外面はナデ調整により仕上げられているが、底部外面は未調整である。胎土は砂粒、ウンモ、クサリレキを含むが密である。焼成は良好である。色調は、にぶい黄橙色であるが、外面は一部茶褐色になっている。

14（写真十一-11、土師質小皿）は土師質小皿である。Tr 124から出土したものである。口径の残存率は約70%である。底部は薄いが口縁は厚く、端部の断面は丸い。口径は8.8cm、器高は1.3cmである。口縁内外面はヨコナデ調整され、底部内面に乱ナデが見られる。底部外面は未調整で成形時の指圧痕が残されている。胎土は砂粒

を少々含むが密である。焼成は良好で、色調は、口縁外面、断面、内面が、にぶい黄色で、底部外面は橙色を呈する。

15(写真十三-1)は美濃天目茶碗の底部である。Tr 39から出土したものである。底部は縁辺に稜を持って立ち上がる。高台の内グリは浅い。高台径は4.5cmである。高台及び底部外面には鬼板(磁化鉄、鉄錠の一種)施され、底部内面(見込み)には天目釉が厚くかけられている。胎土は、きめが細く、にぶい黄色を呈する美濃の土(いわゆるモグサ土)である。焼成は良好であり、色調は、素地がにぶい黄色、鬼板がにぶい赤色、天目釉は黒色を呈する。

16(写真十三-3)は京焼風陶器である。実は肥前産のものである。Tr 95から出土した。薄手の口縁はかすかに内寄気味に立上り、端部はやや尖っている。口径は10.3cmである。ロクロ成形である。薄い透明釉がかけられている。胎土はきめが細かい。焼成は良好で、色調は明るい黄色である。

土師器、綠釉陶器、黑色土器、陶磁器の年代であるが、1、2、3の土師器は7世紀のものである。4、5の綠釉陶器は10世紀中頃から後半のもので、6の中国製青磁は15世紀のものである。<sup>注7</sup>7~10の黑色土器は7、8、9が鎌倉時代、10が室町時代と考えられる。<sup>注8</sup>11~14の土師器小皿はいずれも12世紀代のものである。<sup>注9</sup>15の美濃天目茶碗は15世紀末のものである。<sup>注10</sup>16の京焼風陶器碗は17世紀末のものである。

#### その他の遺物

土師器甕(写真六一-1、2、3、5、6)はいずれも口縁端部の肥厚がみられず、頸部の肩曲もゆるやかなもので布留式より年代の下る、7世紀代のものである。

須恵器甕(写真七一-1~10)1は薄手な体部で外面に成形時の直線状叩き、内面に円弧文が残る。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡灰色である。Tr 124より出土。

2は口頸部であるが内外面とも、ていねいにナデされている。外面に薄い自然釉がかかっている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、色調は灰色である。Tr 27より出土。

3は、体部である。内面には成形時の円文が残るが、外面には細い刷毛目が施されている。薄手(器壁厚6mm)で焼成も悪く、やわらかい、色調は淡灰色である。Tr 83より出土。

4は外面に成形時の直線状叩き、内面に円弧文が残り、胎土は砂粒を少々含むが密であり、焼成は良好で、色調は灰色を呈する。Tr 124より出土。

5は厚手(器壁厚1.1cm)の体部で外面に成形時の直線状叩き、内面には一部に円弧文が残るが、円弧文のない場所もあり、成形時に、円弧文をもったあて具をあてないで手で押えて外面から叩いた場所もあったことがわかる。胎土は砂粒を含むが密であり焼成は良好で、色調は淡灰色である。Tr 1より出土。

6は、外面に成形時の直線状叩き、内面に円弧文を残す体部である。胎土は砂粒を含むが密であり、焼成は良好で色調は淡灰色を呈する。Tr 124より出土。

7は、体部の残片であるが、外面には、他の個体に比べて、狭い目の直線状叩きが成形時につけられ、その上に一部刷毛目が施されている。内面には円弧文が残る。胎土は密で焼成は良好、色調は灰色である。Tr 136より出土。

8は、体部の残片であるが、焼成がきわめてよく、断面の色はにぶい赤色で陶器に近い硬さに焼上っている。内外面は黒色で、縦方向につけられた成形時の直線状叩きを横切るように一定間隔を置いて、ヘラナデ、刷毛目が施されている。内面には円弧文が残る。胎土は砂粒を少々含むが、非常に粘性が強くチョコレート色であたかも備前焼を思わせる。Tr 23より出土。

9は、外面に成形時の直線状叩き、内面に円弧文を残す体部で、胎土は砂粒を含み、焼成は良好で陶器質に近く、色調は内外面灰色断面にぶい赤色を呈する。Tr 56より出土。

10は外面に成形時の直線状叩き、内面に円弧文を残す体部であるが、外面に不定方向の指ナデが叩きの上から4本つけられている。胎土は砂粒を含むが密で、焼成は不良でやわらかく色調は淡灰色を呈する。Tr 154より出土。

#### 土師器高坏（写真七一11、12、14、15）

11は、高坏坏部の口縁であるが、磨耗が著しい。やや深手の坏部と思われる。胎土砂粒クサリレキを多く含み粗い、焼成は不良である。色調は、外面はにぶい橙色、断面はにぶい黄橙色である。Tr 83より出土。

12も高坏坏部の口縁であるが形態特徴は11と同様である。Tr 83より出土。

15は、底部の縁辺に稜を持つ大型の高坏である。手法の特徴は11、12に同じ。

須恵器坏蓋（写真八一2）は、天井部縁辺の稜はまったく退化してなくなっている、天井部中央には切離し痕がある。口縁端部は内傾する狭い凹面を持ち、内外面に成形時のロクロの跡が凸凹となって残っている。胎土は黒色粒子を含むが密であり、焼成は良好で色調は内外面灰色。断面淡灰色を呈する。Tr 56より出土。

#### 須恵器その他（写真九一1～7）

1は、外面がにぶい赤色、断面が灰色に焼上っており。胎土は灰色砂粒を含み、信楽の壺の可能性が高い。Tr 66より出土。

2は須恵器の壺の一部である。Tr 124より出土。

3は須恵器壺の一部である。内外面ともナデ調整され、外面には自然釉が付着している。Tr 124より出土。

4は、須恵器壺の頸部であると思われるが頸部に一条の凸帯を持ち、外面には自然釉が付着している。胎土は砂粒をわずかに含む。特徴が伊賀焼の製品と似ている。Tr 155より出土。

5も須恵器の壺の一部分とみられる。内外面ともロクロナデ調整がされている。胎土は精良で焼成は良好、色調は内外面が暗灰色、断面が灰色を呈す。Tr 60より出土。

6は、須恵器の壺の底部であるが、内外面ともロクロナデの跡が著しい。焼成はよく断面はにぶい赤色を呈す。これも須恵器というより古信楽の種壺に似ている。胎土は白色砂粒を含み、焼成は良好で、内外面は暗灰色を呈する。Tr 56より出土。

7も壺の一部であるが、これも陶器に近い焼上りで断面はにぶい赤色を呈する。内外面ともロクロナデの痕が残り、外面には暗青色の自然釉が付着している。Tr 40より出土。

#### 土師質土器（図版九一8～13）

8は火鉢（手焙り）の口縁である。外面に一条の凹線を廻らし、内面端部は内方に肥厚している。上端は狭い面をなす。内外面ともナデ調整され、外面は炭素が吸着しているが浸透が浅いので一部剥げ落ちている。胎土は白色砂粒、クサリレキを含むが密である。焼成は不良で軟かく、全体に磨耗著しい。色調は、内面橙色、炭素吸着部暗灰色である。Tr 10より出土。

9も同様の火鉢（手焙り）の口縁である。外面には凹線が廻らされたらしいが、磨耗により痕跡だけになっている。口縁端部は内方に肥厚し、上端は狭い面になる。内外面ともナデ調整され、外面は炭素が吸着しているが磨耗により薄くなっている。胎土は白色砂粒クサリレキを含むが密である。焼成は不良で軟かい。色調は、内面にぶい黄橙色、炭素吸着部灰色である。Tr 329より出土。

10は土師質有孔土鍤である。孔は大きく、器壁は薄い。胎土は密で焼成は良好。色調はにぶい黄橙色を呈する。

Tr114より出土。

11は、焼成が悪く土師質になっているが、実際には須恵質大甕として製造されたものである。口縁は外方に折返されており、内面には段がある。内外面ともナデ調整される。口径はよくわからないがかなり大型の甕になる。ようである。口縁の特徴から言って、常滑焼の大甕であると思われる。胎土は砂粒を含みやや粗い。色調は橙色である。Tr13より出土。

12、13は胎土、色調、焼成、内外面がナデ調整されているところなど、11とよく似ており同種の甕であろう。Tr13、Tr114より出土。

#### 平瓦（写真十四-1、2、3）

平瓦は三点出土している。1は内面が布目外面が格子目叩きが残されているが、外面の格子目叩きは一辺が1.8cmと極めて大きい。胎土はクサリレキ、砂粒を多く含み粗い、焼成は不良で土師質であるが、これは2も同様である。しかし火災などで火をうけた瓦が土師質に戻ることもあり、1は磨耗が少ないことからその可能性がある。色調は橙色である。Tr124より出土。

2は外面布目、内面繩目叩きが残されている。胎土は砂粒、クサリレキ、黒色粒子を多く含み粗い。1と同様土師質だが磨耗は少ない。色調は内外面が濃い橙色。断面は橙色である。Tr124より出土。

3は内面に格子目叩きを有するが、磨耗著しく、他の調整は不明。胎土はクサリレキ、砂粒を多く含み粗い。色調は橙色である。焼成は不良で土師質である。Tr154より出土。

#### 土師質小皿（写真十一-1～5。7～10。13～15。）は12枚あるが、10cm以下の口径と推定されるものである。

1は浅手で、口縁端部断面は丸い、色調は橙色である。胎土は精良である。Tr23より出土。

2は口縁が外反するもので、器壁は薄く、胎土は精良で、色調はにぶい黄橙色を呈する。Tr57より出土。

3は、口縁のタチアガリが高く、深手のものである。端部の断面は丸く、胎土は砂粒を少々含むが密である。色調はにぶい橙色を呈す。Tr23より出土。

4は口縁がわずかに上方に屈曲する非常に浅手のもので、端部はやや尖っている。胎土は砂粒を含むが密であり、色調は明るい黄橙色である。Tr130より出土。

5は口縁が外反する形態のもので、端部はやや尖っている。胎土は砂粒、クサリレキを多く含み粗い。色調は明るい橙色である。Tr25より出土。

7は口縁端部内面に沈線を持ち、器壁も厚く（最大厚6mm）、口径も10cm程度あると思われる。胎土は砂粒を多く含み粗い。焼成は不良でやわらかく、磨耗著しい。色調は明るい橙色を呈する。Tr66より出土。

8は口縁の立上りが高く深手の器形のもので内外面ともナデ調整される。口縁の断面は丸い。胎土は精良で、色調は、にぶい黄橙色である。Tr62より出土。

9は、浅手の器形で、口縁は小さく上方へ屈曲し、内面と、口縁外面がナデ調整される胎土は密で、色調は、にぶい橙色である。Tr60より出土。

10は口縁が外反する器形で、深手の小皿である。胎土は砂粒を含みやや粗い、色調は内面が淡灰色、外側がにぶい橙色である。Tr124より出土。

13は、口縁端部断面が丸い小皿である。厚手で色調はにぶい橙色である。Tr124より出土。

14は、口縁が外反する小皿である。口縁外面と内面はヨコナデ調整がされる。端部はやや尖っており、器壁は薄い（3mm）。胎土は精良で、色調は、黄灰色である。Tr322より出土。

15は厚手で口縁端部の丸い小皿でやや深手である。胎土は砂粒を含み、やや粗い。焼成は良好で、色調はにぶ

い黄色である。Tr 124より出土。

灰釉陶器碗（写真十一—4）は、須恵質の灰釉陶器である口縁端部が欠損している。外面上半と内面に灰釉が施されている。高台はやや小さい。胎土は精良で焼成は良好であり、色調は素地は淡灰色で釉は薄緑色である。Tr 403より出土。

須恵器壺（写真十一—5、7、8、10、12、13）は蓋と壺の両方があるが、蓋に付くべき宝珠つまみは1つも出ていない。

5は、宝珠つまみのつかない古い型式（II型式）の環蓋である。<sup>注11</sup> 口縁端部は内傾する狭い面をつくっている。胎土は精良で色調は淡灰色である。Tr 40より出土。

7もII型式の環蓋であるが、これは、口縁端部がナデられやや外反している。胎土は精良で色調は暗灰色である。Tr 130より出土。

8は宝珠つまみをもつ环蓋（III型式3、4段階）で、へん半な天井部で、口縁端部は小さく下方へ折り曲げられている。胎土は精良で色調は淡灰色である。Tr 83より出土。

10は壺Aの底部である。焼成はたいへん悪く、磨耗著しく器壁は薄くなっている。色調は淡灰色、胎土は砂粒を多く含みやや粗い。

12は壺Aの底部である。胎土は砂粒を含むが密である。色調は灰色である。Tr 83より出土。

13は壺Bの底部である。高台は貼付けで外方へふんばっている。胎土は砂粒を含むが密である。焼成は良好で、色調は灰色である。Tr 259より出土。

黒色土器（写真十二—4、6、7）

4は底部であるが、高台は貼付けで、断面三角であるが、外方へふんばっている。炭素の吸着がまったくみられない。胎土は精良である。色調は橙色である。Tr 27より出土。

6は口縁であるが、端部はやや外反している。内面に炭素が吸着しているが、磨耗のため薄くなっている。胎土には砂粒を含み、色調は明るい橙色である。Tr 112より出土。

7は黒色土器の底部であるが、高台は断面台形で外方へふんばっている。高台内に炭素が吸着している。胎土は砂粒を含み、やや粗い。色調は、にぶい橙色で、炭素吸着部は暗灰色である。Tr 39より出土。

近世陶磁器（写真十三—4、5）

4は土師質よりやや硬い軟陶に焼上がった壺である。ロクロ成形で、底部にハナレ砂の痕がある。底部よりやや上に鉄釉がかけられている。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。色調は素地は橙色、鉄釉はにぶい赤色である。

5は信楽焼の播鉢である。内面に播目がつけられた後、内外面に鉄釉がかけられている。胎土は密である。色調は素地は明るい灰黄色で、鉄釉はにぶい赤色である。

## 5 む す び

調査の結果、当該地に古墳時代に遡る可能性の高い古代から中世にかけての複合遺跡が存在することが、大づかみながら確認できた。とくに集落および兵主神社近辺では数10cmの耕土の直下に良好な遺物包含層が検出されるような状況であったことから、それらのほとんどの地点が事業者側の理解によって工事の中止が決定された。また若干ながら遺物を出土する地点においても暗渠排水敷設レベルのアップによって遺構の破壊の可能性ができるかぎり免れる措置がとられた。

## 注

- 1 滋賀県教育委員会『滋賀県文化財調査年報 昭和54・55・56年度』および同書昭和57年度
- 2 注①同掲書の昭和57年度および昭和58年度
- 3 昭和55年度『滋賀県遺跡目録』記載の古地大寺遺跡を示したが、同名遺跡として古地集落の東側が昭和58年度で第4次調査まで進んでおり、奈良時代から室町時代までの非常に密度の高い遺物・遺構を出している。
- 4 大橋康二 鍋島藩窯跡出土の京焼鳳凰器(上)(中) セラミック九州7・8 佐賀県立九州陶磁資料館 昭和58年3月。
- 5 中村 浩 球邑Ⅲ 大阪府教育委員会 1978年3月
- 6 平城宮発掘調査報告書Ⅳ 奈良国立文化財研究所 昭和53年3月
- 7 横口敏文、北野俊明 船尾西遺跡発掘調査概報 堺市教育委員会 1978年3月
- 8 大橋康二、尻八館調査報告書 青森郷土資料館 昭和56年3月26日
- 9 井上喜久男 美濃編年図表 日本やきもの集成 平凡社 昭和55年10月24日
- 10 注4に同じ。
- 11 注5に同じ。
- 12 同上。
- 13 同上。

## 第2章 虫生遺跡

## 1 はじめに

本報告は野洲郡中主町における県営ほ場整備事業・暗渠排水跡敷設工事に伴い、昭和59年度に実施された虫生遺跡の発掘調査結果である。

虫生工区の工事対象地は、童子川と新川にはさまれた約4.5ヘクタールの地点（北区）、童子川の西岸に沿って連なる約5.5ヘクタールの地点（東区）、さらに虫生集落の北から西部北半にかけて集落に近接する約11ヘクタールの地点（西区）の3地区にまとまる。越工事面積約21ヘクタールに対して、敷設する暗渠排水路は計約226個所である。

調査は当遺跡も同様嘱託調査員岩間信幸が担当した。調査期間は昭和59年11月から12月までで、一部翌年2月までおよんだ。また以下の調査補助員各氏の参加があった。

大西 煉	井上 誠	塙本 和也	山元 幸彦	北島 昭宏	小林 義幸	大林 剛浩
柴田 貴志	貝 英幸	南谷 泰司	平尾 良一	前出 駿明	早川 透	好光 幹雄
安倍 宏和	上田 康之	前田 康史	平田 誠	(順不同)		

また、調査期間中は関係諸機関ならびに地元の方々に絶大な御協力・御理解をいただいた末筆ながら、ここに記して謝意を表します。

尚、本書の作成は岩間信幸が担当したが、全般にわたくちで稻垣正宏の協力を得、さらに「4、遺物」の項の文責をも負ってもらった。

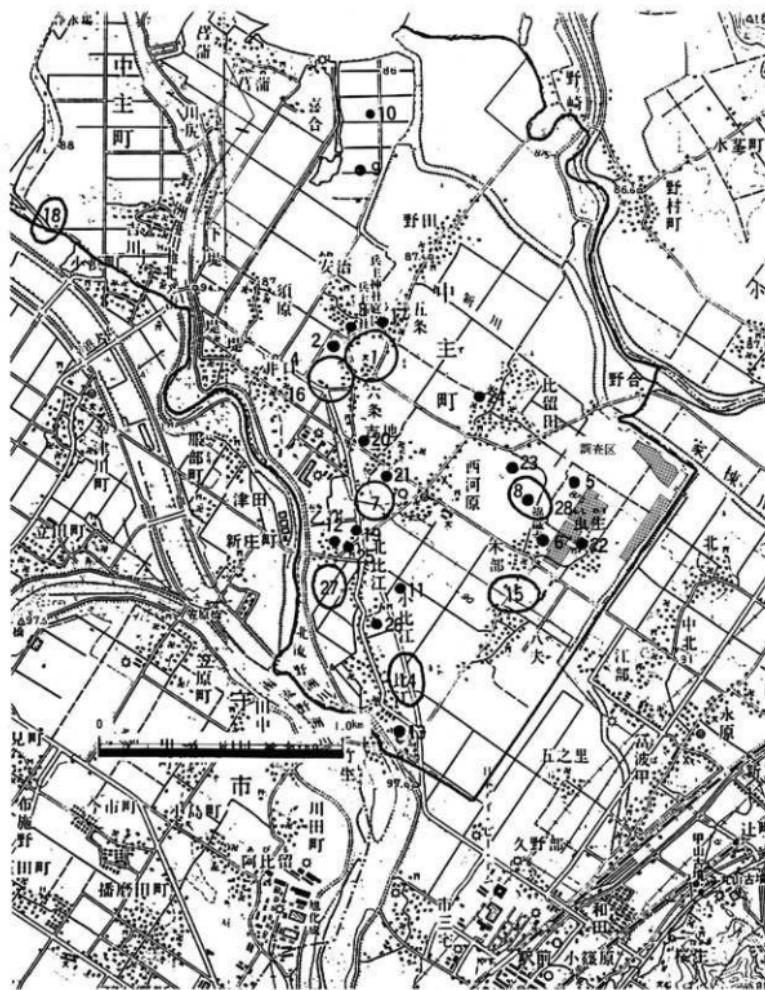
## 2 位置と環境

虫生遺跡は野洲郡中主町大字虫生に存在する。日野川と野洲川北流の造る中洲に立地する中主町にあっては南東端に位置し、東は童子川を隔てて野洲町と接し、北は比高差の少ない水田が続く。南は県道六条・野洲線が通って八戸と繋てる。その北側に集落があるが、その内に天正年間開基の真宗木辺派称名寺、天智天皇7年勅請を伝える虫生神社が座している。

文化財の存在については、古くより源兵衛屋敷と称し、虫生城跡とも伝える虫生城遺跡が集落北端に所在するが、集落全体を囲んで、やや北に広がる遺物分布範囲が虫生遺跡として確認されている。今回の調査対象地では西区の東部がその遺跡分布範囲内にはいっており、西南部が木部遺跡の東南部にいくこむ。また分布調査で虫生遺跡の北東に南北に細長い遺物分布を示す虫生野畠遺跡が確認されており、古墳時代の遺物を出土する。調査区では東区がその南限にはいる。また東区の西南端が虫生遺跡の東隅をかすめている。調査の事例は管見の知るかぎり少なく、昭和58年度のは場整備事業に伴う調査で、集落北東部から耕土直下に弥生時代から奈良時代までの遺物包含層と若干のピット・土壙が検出され、虫生遺跡の全容の解明は途につき始めたばかりである。

## 3 調査

上述の工事規模から、調査の結果によっては事業者側との協議を得なければならない余裕を考慮して、調査は

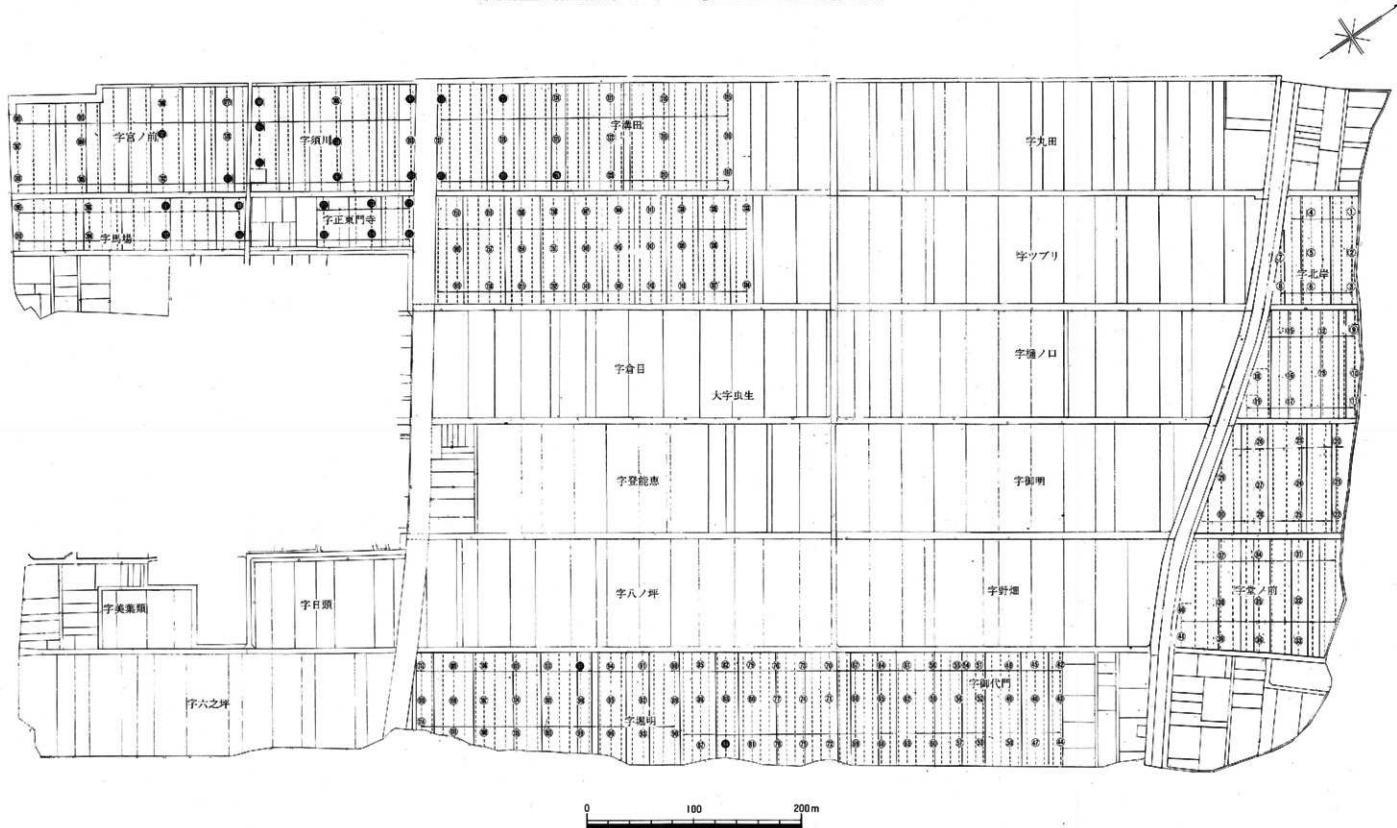


- |         |          |           |            |
|---------|----------|-----------|------------|
| 1 五条道跡  | 8 木部道跡   | 15 木部道跡   | 22 生城道跡    |
| 2 法光寺道跡 | 9 野田新川道跡 | 16 六条道跡   | 23 麻原道跡    |
| 3 大日堂道跡 | 10 野田沼道跡 | 17 兵主道跡   | 24 広地城道跡   |
| 4 菩提堂道跡 | 11 小比江道跡 | 18 吉川南道跡  | 25 鷹部尾敷道跡  |
| 5 天神山道跡 | 12 佐智寺道跡 | 19 伏見堂道跡  | 26 梅吉尾敷道跡  |
| 6 佛龕寺道跡 | 13 比江南道跡 | 20 吉地大寺道跡 | 27 乙庭道跡    |
| 7 光明寺道跡 | 14 比江道跡  | 21 曾近坊道跡  | 28 木部天神前道跡 |

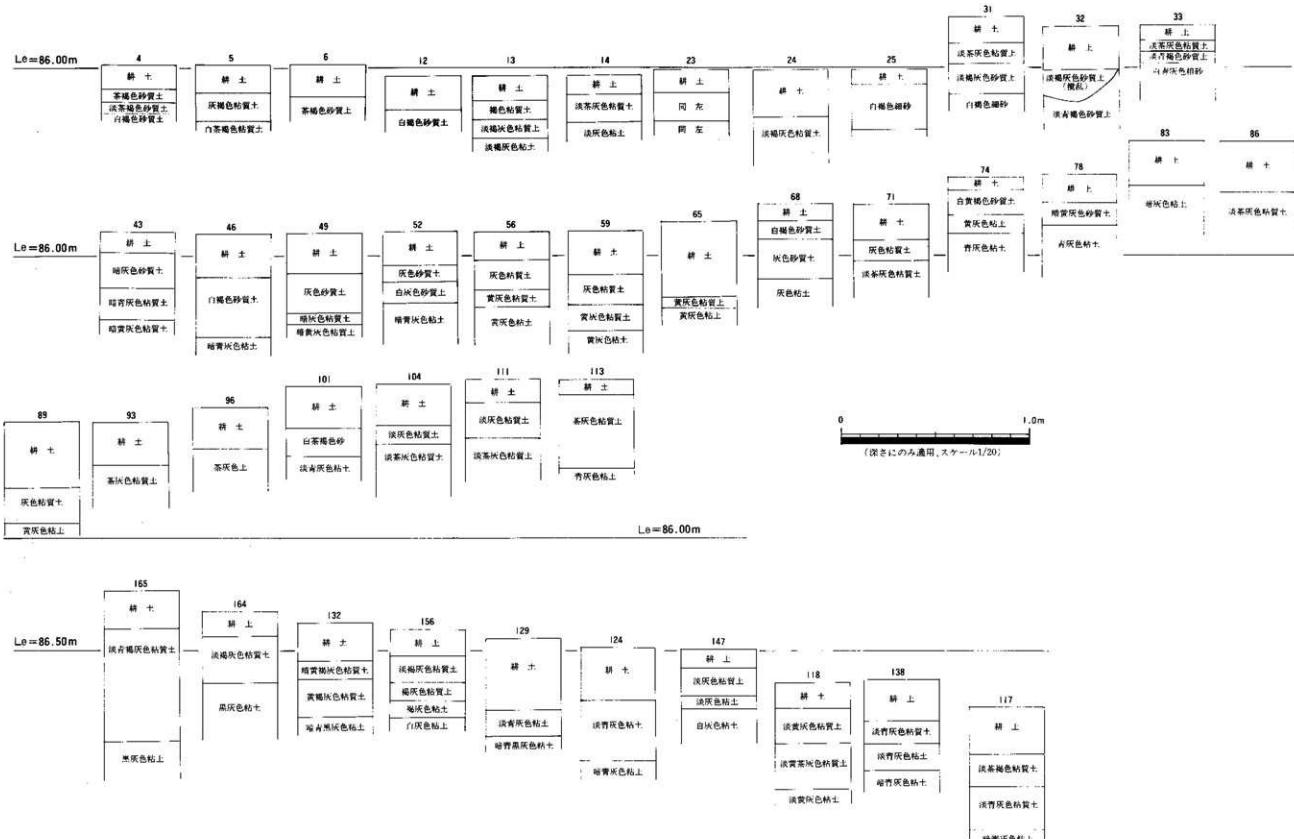
第1図 遺跡位置図

県営圃場整備事業中主地区虫生工区確定図

○ 無遺物  
● 遺物出土



第2図 遺跡全体図



第3図 柱状上層図

遺跡全体の状況を早急に把握する必要があった。そのために調査方法は、バケットに鉄板をはかせたバックフォードで排水路地点を中心に1本につき上・中・下の3個所にトレント（1m×3m）を入れ、層序に配慮しながら遺物・遺構の精査につとめ、工事レベル深度まで掘削することを原則とした。トレントの配置の間隔については、土地所有者への配慮から、すでに区画整理された田圃1枚につき1個所（トレント3個）かあるいは排水路3本のうち1本という原則で進めていくこととした。掘削後は、断面および掘削終了面の清掃精査を行ない、記述と写真による記録化をはかった。

調査地点はまず童子川西岸近接の一帯（東区）を南端より北上することから始めた。この一群では調査本数24、トレント個数75である。調査の結果、遺構は確認できなかった。遺物は19ヶ所のトレントから出土しているが、磨滅の著しい細片が各々に少量づつ出土するのみで、土師質土器が多く、若干の近世磁器類がある。当調査区北半が町の分布調査で古墳時代の集落跡とされる虫生野畠遺跡の南端の範囲にはいっており、遺構は当事業の掘削深度90cm以下に存在する可能性を残す。遺物の出土層位についても良好な包含層は検出できなかったが、童子川沿いのトレントで検出された青灰色砂層より若干の土師質土器が出土しており、同川上周辺の遺跡の存在に期待がもてよう。また、Tr 86・93・96・113で耕土下に茶灰色粘土質が検出されている。トレント内での遺物出土状況には注目すべき点はないが、同層は西区包含層と同質のものであり、周辺および以西で良好な遺物包含層とのつながりを注意しておきたい。

北区では遺物の出土が皆無で、家棟川寄りのトレントで灰色砂層が検出され、湧水があった。

西区では遺物包含層と若干のピット状遺構を確認できた地点があったが、図示できる良好な遺物は出土していない。県道六条・野洲線バイパス以北では耕土下に灰色粘土層が厚く堆積し、そこでは無遺物であった。Tr126ではGL 55cmで暗灰色粘土層から若干の遺物をみ、同層は集落につながる包含層であることが確認できた。町分布調査における虫生遺跡の北限からやや西限への分布ラインに一致する。同層は同バイパス以南に至って、遺物の包含密度を高くするが、色調がやや黒灰色を濃くすることから、以北とは別層と考えることができるが、それを決定するほどの良好な遺物は出土しなかった。遺物包含層はさらに南へTr179・191・192のラインまで確認でき、虫生遺跡の西限を分布調査でそれよりやや広く決定できたが、木部遺跡の東端ライン内とされる地点に遺物包含層は確認していない。

## 4 遺 物

出土遺物には土師質土器の細片が多い。口縁や底部を持つ実測可能なものは少なく、年代まで推定できるような大きな破片も当然のことながら少ないと。

図版十一-1は、土師質の三足釜の脚である。下端・上端は欠損しているので長さは不明である。成形は手づくりで、ナデ調整される。胎土は砂粒を少々含むが密である。焼成は良好で、色調はあかるい黄橙色を呈する。西区Tr191出土。

図版十一-2は、黒色土器宛の底部である。高台は貼付で外方へふんばっており、糞付中央の一点で接点する。ナデ調整される。内面の剥落が著しく、また炭素の吸着が悪かったせいか、炭素はまったく付着していない。胎土は砂粒を少々含むが密であり、焼成は良好で、色調はあかるい黄橙色を呈する。東区Tr 84出土。

図版十一-3は、波佐見系磁器の小碗である。胎上は鉄分の多い灰色を呈し、文様を描いている異須も発色が悪く、釉はにごっている。焼成は良好で胎土は密である。東区Tr 97出土。

図版十一 4は、陶器の甕の体部である。内外面は泥漿が施され、にぶい赤色を呈する。断面は橙色である。胎土は砂粒を多く含み、やや粗である。焼成は良好である。器壁幅は0.6cmである。東区Tr97出土。

図版十一 5は、陶器の甕の体部である。4と同様内外面に泥漿が施され、にぶい赤色に発色している。断面は灰色である。胎土は砂粒、黒色粒を多く含み、やや粗い。焼成は良好である。器壁幅は0.9cmである。

2は鎌倉時代、3は18世紀のものである。

## 5 む す び

今回の調査結果によって暗渠排水路敷設レベルの深度が変更され、遺跡の破壊が可能なかぎりにおいて回避された地点は、西区県道六条・野洲線バイパス以南の、字名須川、正東門寺および馬場の北半である。この地点はちょうど分布調査範囲で木部遺跡東隅と虫生遺跡西隅との接点にある。諸々の事情から充分な調査は今回行えていない。今後の本格的な調査に期待しつつ、蛇足ながら付言すれば、虫生遺跡の範囲が西側の密度の高い遺物包含層でやや広がり、木部遺跡との重なりに注目できよう。

### 第3章 八夫遺跡

## 1 はじめに

本報告は野洲郡中主町における昭和59年度は場整備事業暗渠排水路敷設工事に伴い、実施された八夫遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

今回の八夫工区の対象地は、当集落の北東端に接する第七一1号支線道路から集落南端を周って町道小比江一童子川線まで北上し、集落のはば南北区をとり回んで散在する。面積約17haに対して排水路約170個所の敷設である。

調査は五条遺跡と同様嘱託岩間信幸が担当した。また以下の調査補助員の参加があった。

早川 透 上田 康之 川見 恭正 政岡 伸洋 安部 宏和 北島 昭宏 西村 久史  
小林 義幸 大西 熊 塚本 和也 平尾 良一 井上 誠 大林 剛浩 山元 孝信  
林田 新吾 (順不同)

調査期間中は季節柄想像を絶する条件下に耐えた日々も多く、ここで各位に謝意を表わしたい。

尚、調査期間中、中主町教育委員会、同町土地改良区、県土地改良課、地元工区、土地所有者の方々に絶大な御協力をいただいた。

本書の作成にあたっては全般にわたり、稻垣正宏氏の尽力を得て岩間信幸が担当し、4、遺物の項のみ稻垣の文責になる。

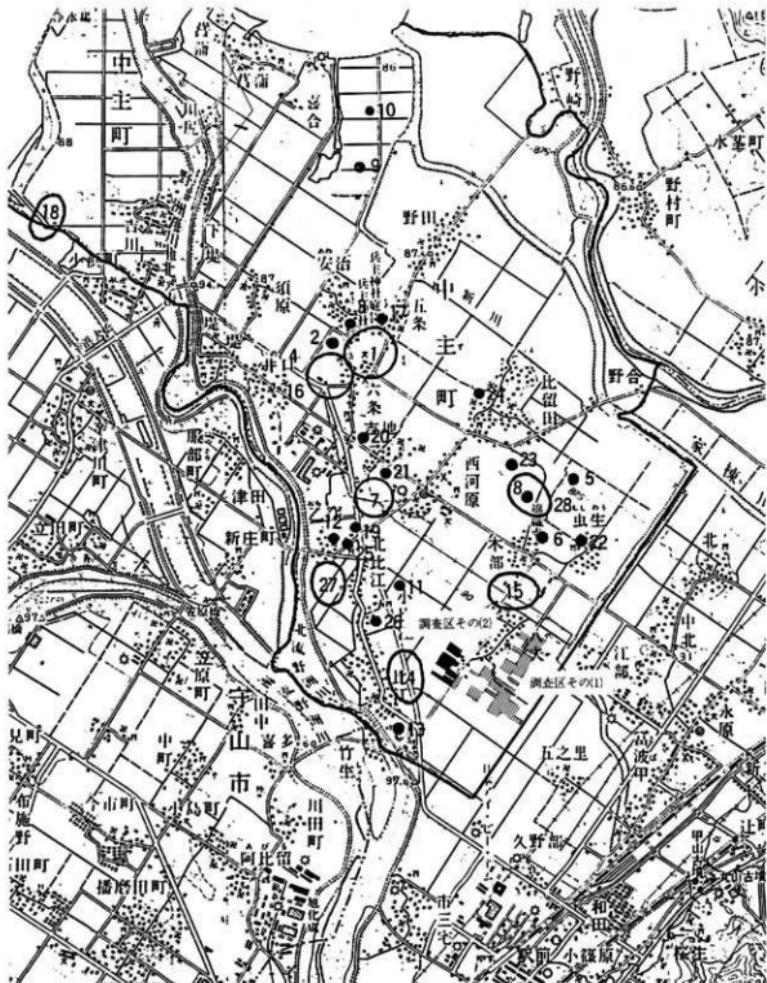
## 2 位置と環境

八夫遺跡は野洲郡中主町大字八夫に所在し、現集落を中心に弥生時代から近世にかけての遺物を散布する集落遺跡として周知されている。中主町の南東端に位置し、南東は童子川を隔てて野洲町に接する。集落は主に県道木部・野洲線の東側に集中し、条里制の遺構である坪名の小字名が町内でもっとも多く残っており、早くから開拓された農業地域である。寺社には真宗仏光寺派正源、真宗大谷派道榮寺、高木神社がある。

埋蔵文化財の発掘調査によって遺跡の存在が明らかになった事例は少ないが、昭和57年度の調査で、集落南西部の県道木部・野洲線と町道小比江・童子川線の交差地点北側で、耕土下90cmより弥生時代前期新段階の単純包含層が検出されており、注目される。

分布調査においては、上述調査地点北方に奈良時代から平安時代にかけての寺院跡として八夫西・郷遺跡が八夫遺跡範囲内におさまる。また集落東側から野洲町永原にかけて八夫流遺跡があり、弥生時代の集落跡に推定されるが、それも前期のみの比定の可能性が考えられている。また木部・西河原にまたがる木部潟の部遺跡は八夫遺跡に東側に接しており、弥生時代前期より中期の遺物を多く出土することが報告されている。今回の調査区は八夫流遺跡の南端に位置する地点が東端にあり、その他の大部分が八夫遺跡の分布範囲内にはいる。

以上により、日野川と野洲川旧北流の造る中洲の、より上流地帯の微高地にある八夫では、その下流域で良好な遺跡があきらかにされ始めている木部・五条遺跡より比較的古い時期の遺跡が地下にまだ多く埋蔵されている可能性はきわめて高い。

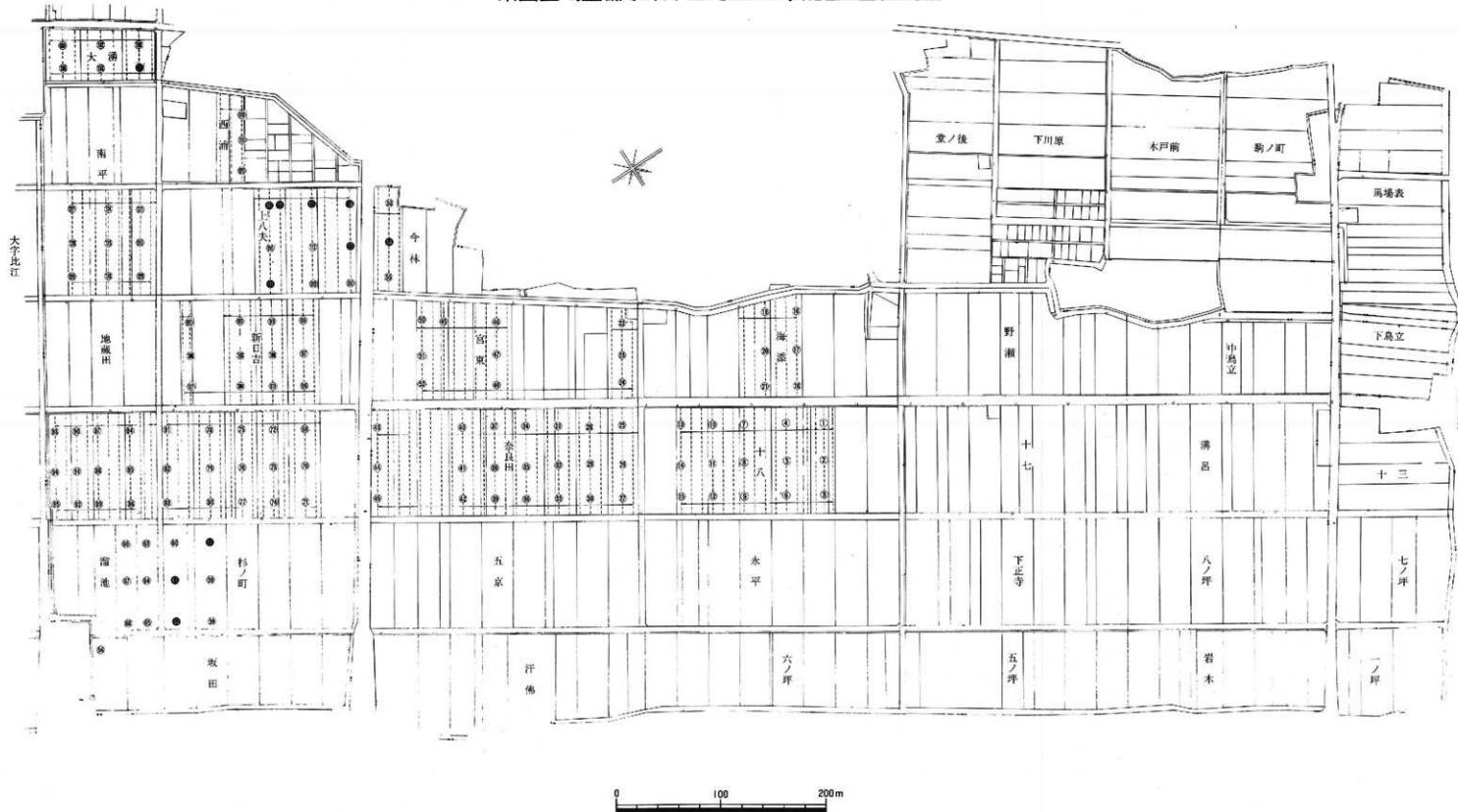


第1図 遺跡位置図

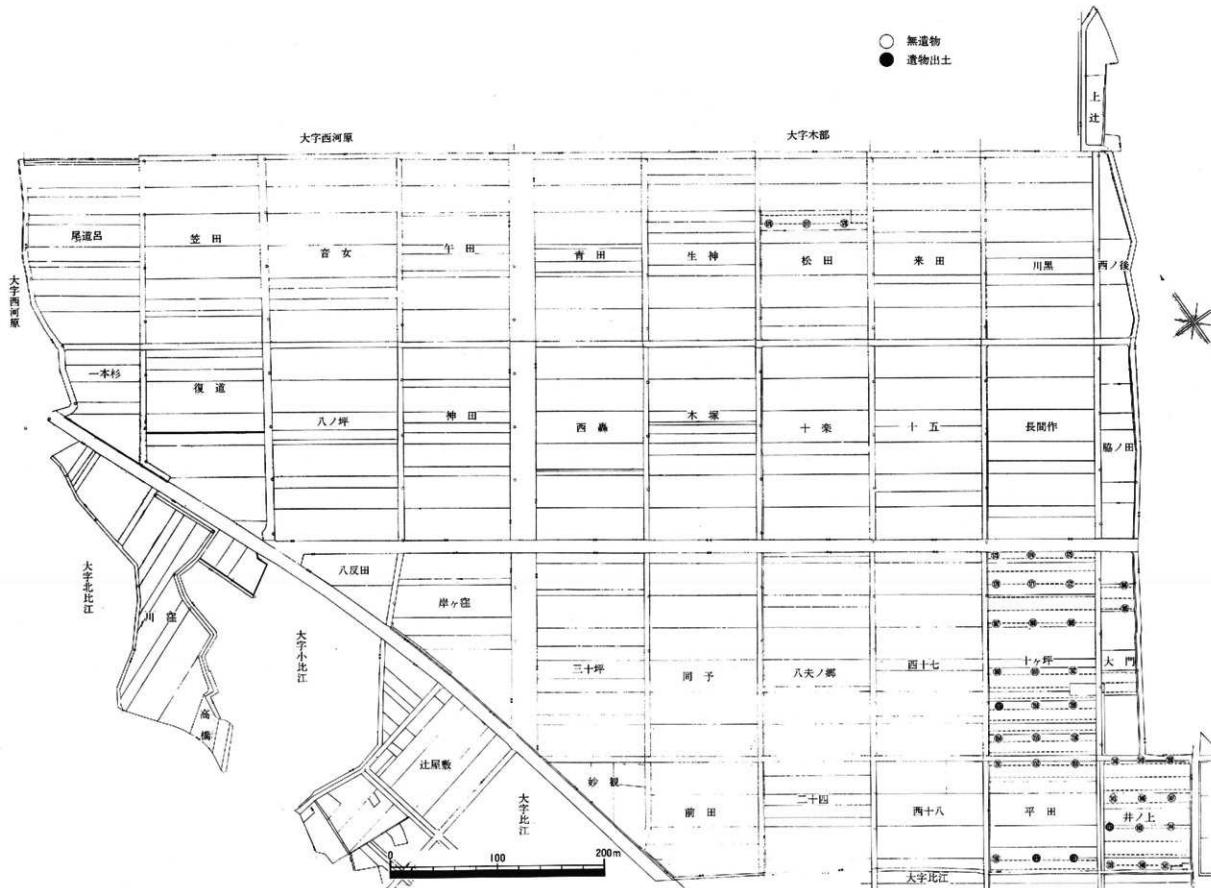
- |   |         |    |         |    |         |    |           |
|---|---------|----|---------|----|---------|----|-----------|
| 1 | 五条道迹跡   | 8  | 木部道跡跡   | 15 | 木部道跡跡   | 22 | 虫生坂道跡跡    |
| 2 | 光元寺道跡跡  | 9  | 野田川新道跡跡 | 16 | 六条道跡跡   | 23 | 庵原坂道跡跡    |
| 3 | 大日堂道跡跡  | 10 | 野田沼道跡跡  | 17 | 兵主吉道跡跡  | 24 | 茂戸城道跡跡    |
| 4 | 小比江城道跡跡 | 11 | 小比江城道跡跡 | 18 | 吉南南道跡跡  | 25 | 藤屋町道跡跡    |
| 5 | 仏性寺道跡跡  | 12 | 仏性寺道跡跡  | 19 | 伊庭大寺坊跡跡 | 26 | 梅吉屋町道跡跡   |
| 6 | 天神山道跡跡  | 13 | 比江南道跡跡  | 20 | 吉古大寺坊跡跡 | 27 | 乙宿道跡跡     |
| 7 | 錦織寺道跡跡  | 14 | 比北道跡跡   | 21 | 智賀前坂道跡跡 |    | 木部山神前坂道跡跡 |

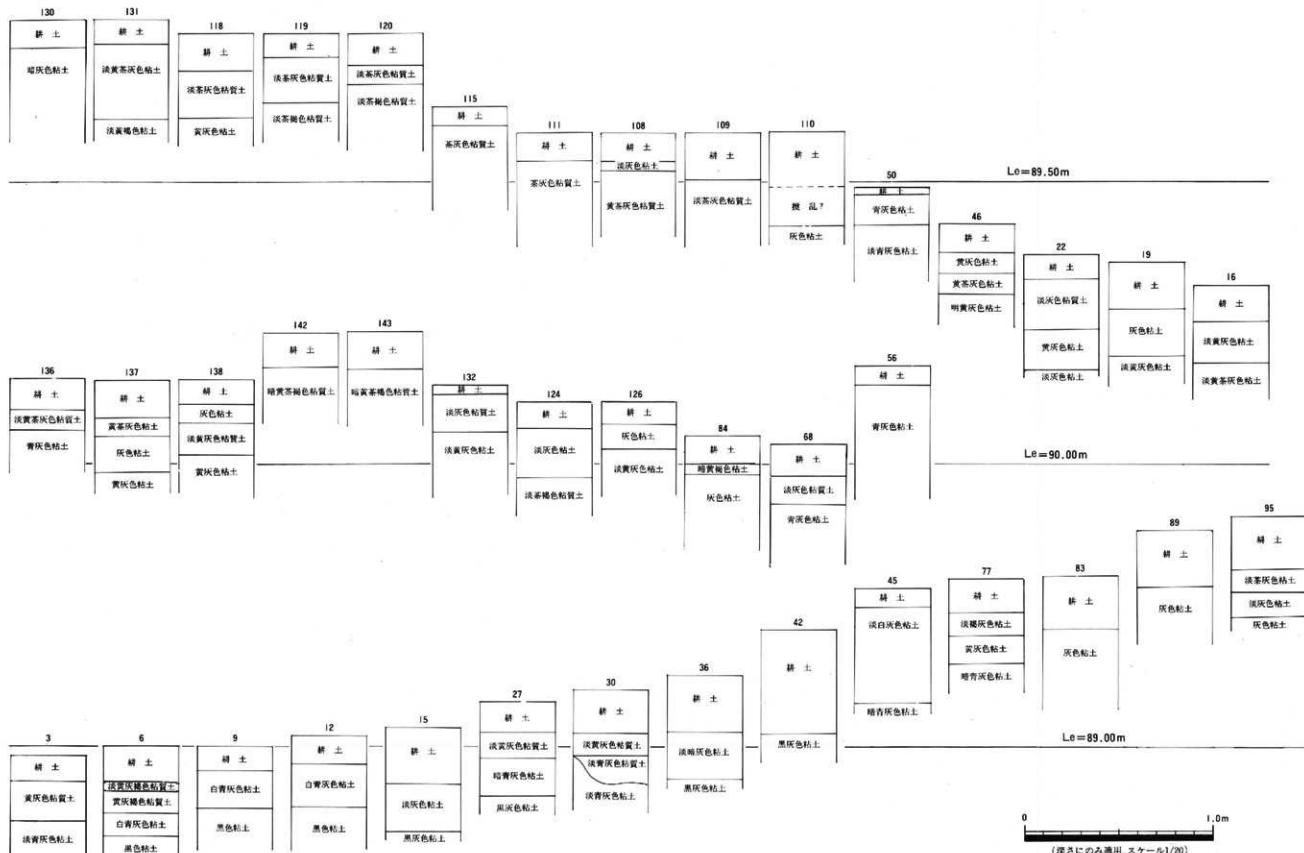
県営囲場整備事業中主地区八夫第12工区確定図

○ 無遺物  
● 遺物出土



第2図 遺跡全体図その1





第4図 柱状土層図

### 3 調査

調査は上述の工事規模により、工区全体の遺跡の状況を早急に把握することを主眼としたため、トレンチを多く均等間隔で設定することにとめた。そのために方法は、バケットに鉄板をはかせたバックフォーによって排水路敷設地点を中心に1本につき上・中・下の3方にトレンチ（1m×3m）を入れ、層序に配慮して遺物・遺構の検出・精査につとめ、工事レベル深度まで掘削することを原則とした。トレンチの配置の間隔については、土地所有者への均等な配慮から排水路3本につき1個所（トレンチ3個）ないしは区画整理済みの田圃1枚につき最低1個所という原則で進めていった。掘削後は人力でトレンチ断面および掘削終了面の清掃精査を行ない、写真と記述による記録化をはかった。

調査は東部から進められ、遺物を出土するトレンチが20個所を数えたが、大部分が磨滅する土師質土器の細片を各々少量ずつ出土する状況で、比較的良質の遺物包含層を確認し得たのは一部分の地域にとどまった。遺構は遺物包含層に切り込むピット状のものが数基確認されたにとどまる。以下、前節に関連してもう少し詳説を加えていきたい。

当区は耕土下に厚い灰色粘土層がみられるのが普通であるが、東端区から南方向の一部で灰色粘土層下に黒色および黒灰色粘土層の堆積が認められ、遺物を出土する。当区内での同層の南限はTr39までで、そこでは30cm程度の厚さとなり、東方に向かっては深く、排水路敷設レベル以下となる。そのため低を確認できていないトレンチは1、2、5、6、8、9、11、12、14、18で、町分布調査の示す八夫流遺跡の南限と一致して興味深い。ただし今回の調査では黒色粘土層が良質の遺物包含層と判断するデータは得られなかつたが、磨滅の著しい土師質土器細片の中には比較的古式の様相を呈する可能性のある部位が想像し得る破片が若干あり注意しておきたい。

耕土下の層位は現集落に近づくにつれ、粘土層が褐色を帯びるようになる。Tr46、97、108 111、114、119、124、128、131ではほぼ完全に褐色粘質土層と認められるようになり、Tr114では耕土直下の茶灰色粘質土層を切り込む土括状の遺構を確認している。遺物はその出土量に増加はないが、細片ながら皿、高杯と判別できる少片が出土するようになるが、図示できるほどの遺存度の高いものはほとんどない。

集落南部から西方にかけての地区では耕土下に礫をふくむ砂質土層が検出される地点が多くなっており、若干の遺物を含む。

### 4 遺物

八夫遺跡出土土器は土師質土器の細片が多い。口縁部や底部を持ち実測できるものはややあるが、いずれも口縁の残存率が低く実測しても不正確になると思われたので写真にのみ記録した。

図版八-1は土師器の縁の口縁であるが、端部内面に段を持ち、环の可能性もある。胎土内外面ともナデ調整され、胎土は白包砂粒、ウンモを少々含むが密である。焼成は良好で色調は、明るい黄橙色である。口縁外側が強くヨコナデされ凹むのが特徴である。

図版八-2は、土師質火鉢の底部である。外面には貼付けによる足が一つ残っている。調整はナデ調整である。胎土は砂粒、クサリレキを多く含み粗い。焼成は良好で、色調は外面が明るい橙色、内断面は明るい黄橙色であ

る。

図版八-3は、波作見系磁器碗の底部である。高台は施釉されておらず、釉は厚く青白くにこっており、内面に貫入がある。胎土は鉄分を多く含み灰色である。

図版八-4は信楽焼指鉢の口縁である。口縁端部は強いナデにより外反し、内面には段をつくる。播日は間隔をおいてつけられている。胎土は砂粒を少々含むが密である。焼成は不良で土師質に近い、色調は明るい黄橙色である。

図版八-5は須恵器壺の頸部である。内外面ともナデ調整される。焼成は良好で、断面にはぶい赤色を呈する。内外面は暗灰色である。胎土は精良である。

図版八-6は土師器环身である。端部内面に一条の沈線を刻む。器壁は薄い。焼成は不良で軟く、内外面とも磨耗が著しい。胎土は砂粒クサリレキを少々含むが密である。

図版八-7は日本製三島手大鉢である。肥前諸窯でつくられたものである。外面は鉄釉をかけ、内面は白土による象眼がされている。胎土は密であり、にぶい赤色を呈す。焼成は良好である。外面の鉄釉は褐色である。

出土遺物の年代は3が18世紀。4は15世紀のもの。6は奈良時代。7は17、18世紀のものである。

## 5 む す び

調査の結果、現集落南東部附近に遺物・遺構を若干伴う地点が確認され、工事レベルの変更により可能な限り破壊をまぬがれることになった。字名上八夫と称される地点である。調査の質の点で、前節で記した条里制に伴う遺跡を検出できなかったのが、耕土直下の浅い遺跡の保存はとりあえず達成でき、今後の本格的な調査に期待する。

# 五条遺跡 図版



兵主神社東部（西より）



兵主神社東部（南から）



兵主神社東部（東から）



兵主神社西部（西より）

圖版三

(上) Tr  
33 斷面

(下) Tr  
37 斷面



兵主神社西部 Tr33 遺物包含層検出断面



兵主神社西部 Tr37 耕土下遺物包含層検出断面



兵主神社西部 Tr42 遺物包含層および遺構検出断面



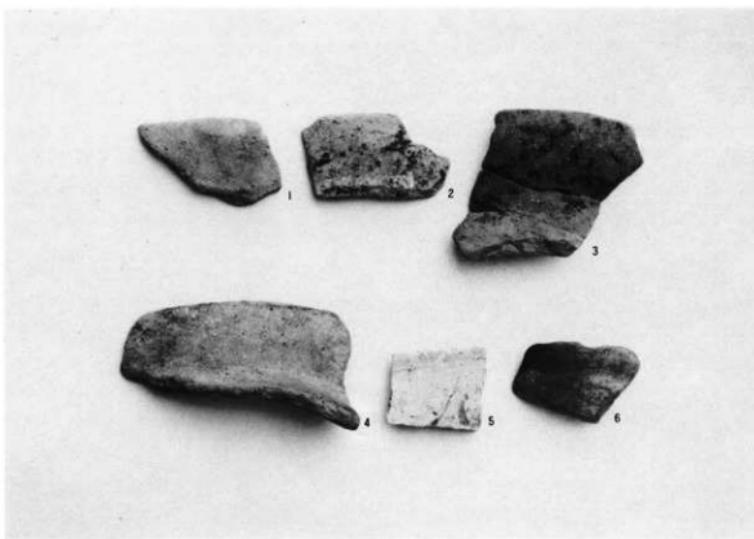
兵主神社西部 Tr56 耕土直下遺物包含層検出断面



兵主神社南部 Tr310 遺物包含層および遺構切り込み状況



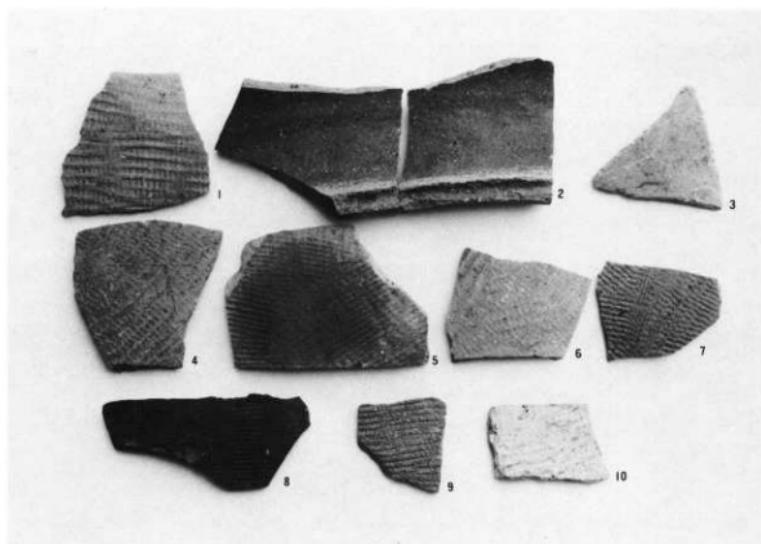
兵主神社南部 Tr313



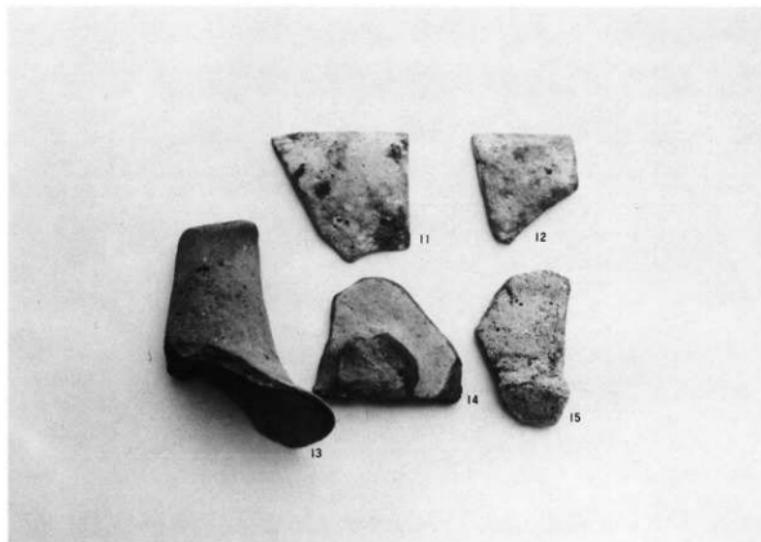
土師器裏外面



同內面



須志器製



土師器高坏



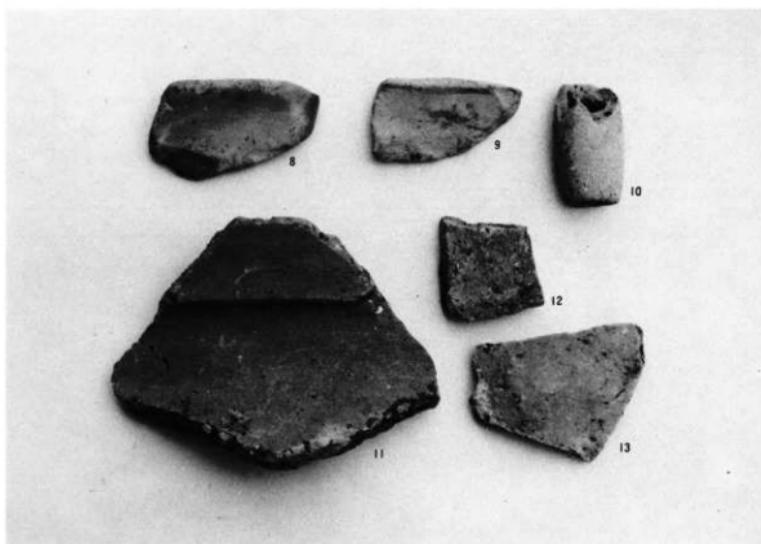
須惠器坏



須惠器高坏



須惠器



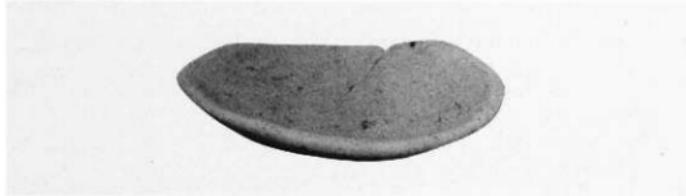
土師質土器



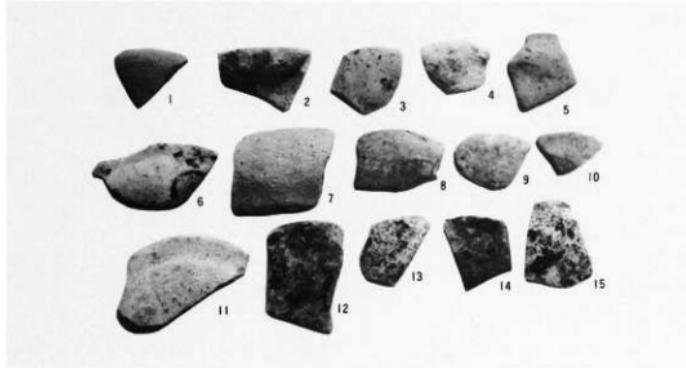
須惠器環蓋



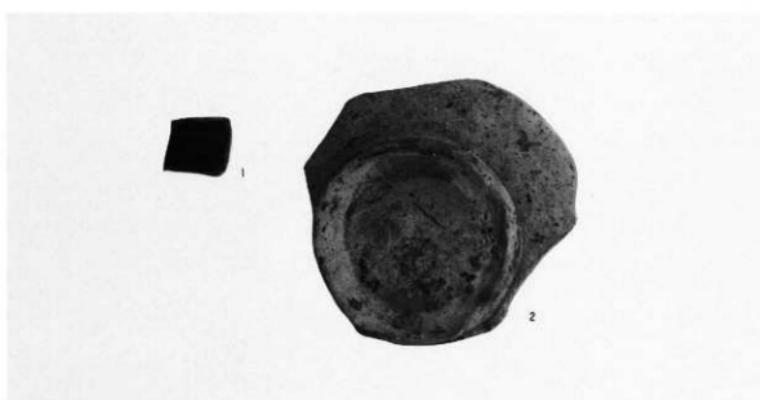
須惠器環身



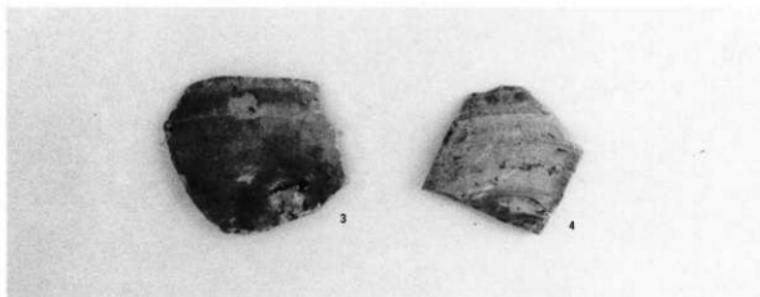
土師質小皿



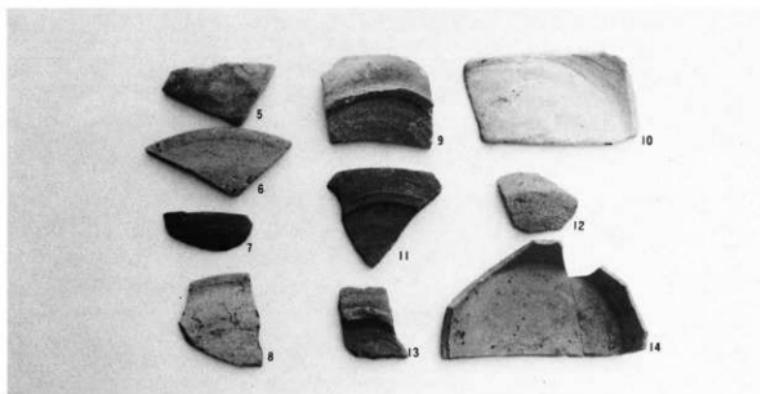
土師質小皿



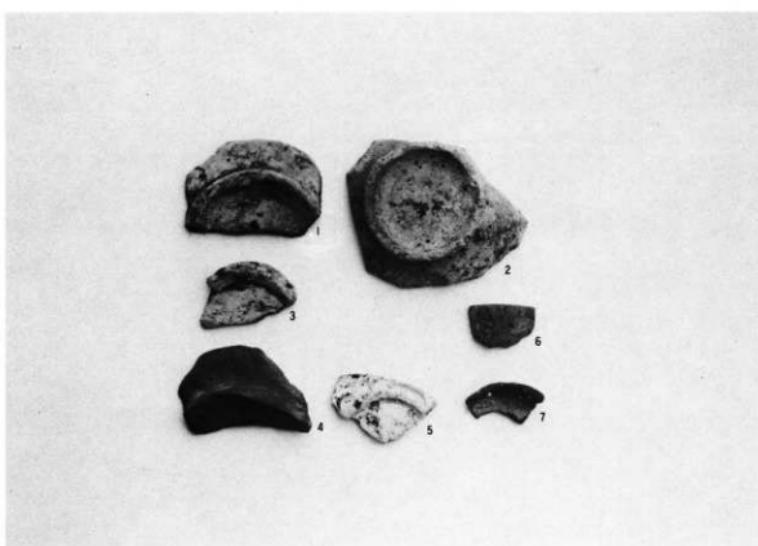
綠釉陶器



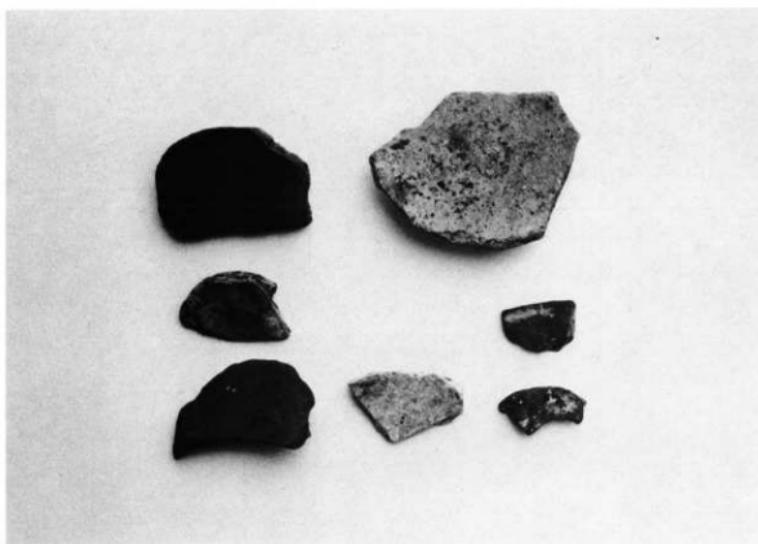
黑釉陶器



瓢形器坏



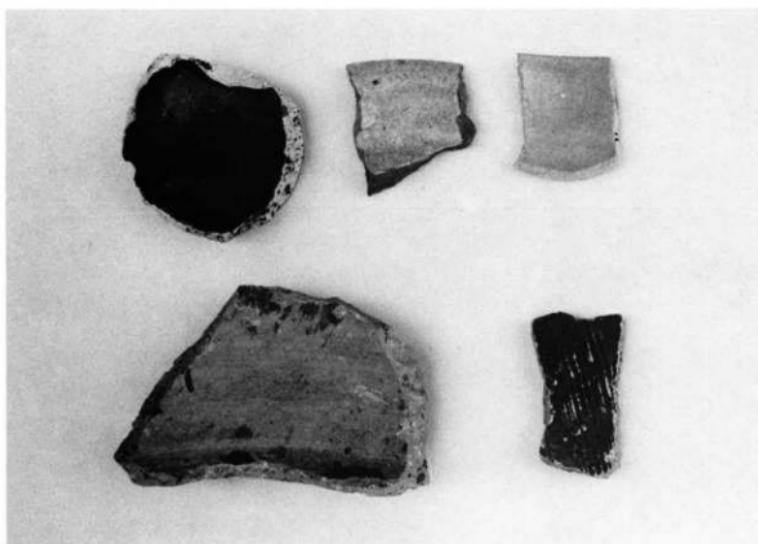
黑色土器外面



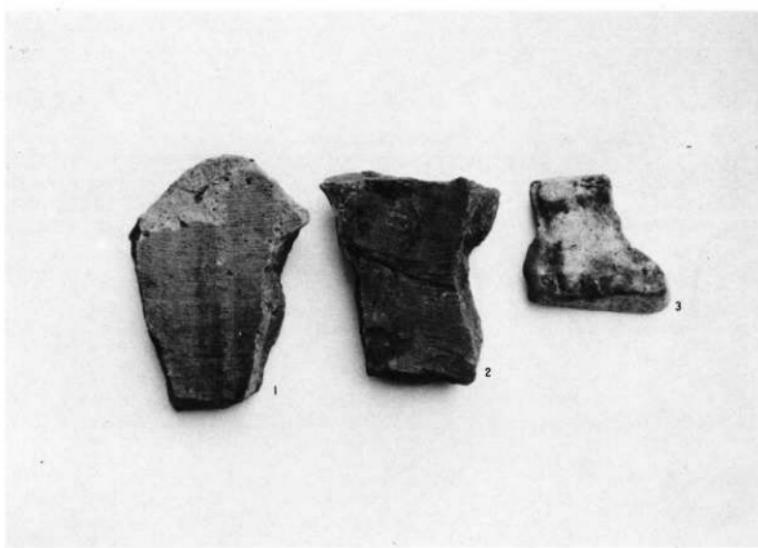
同內面



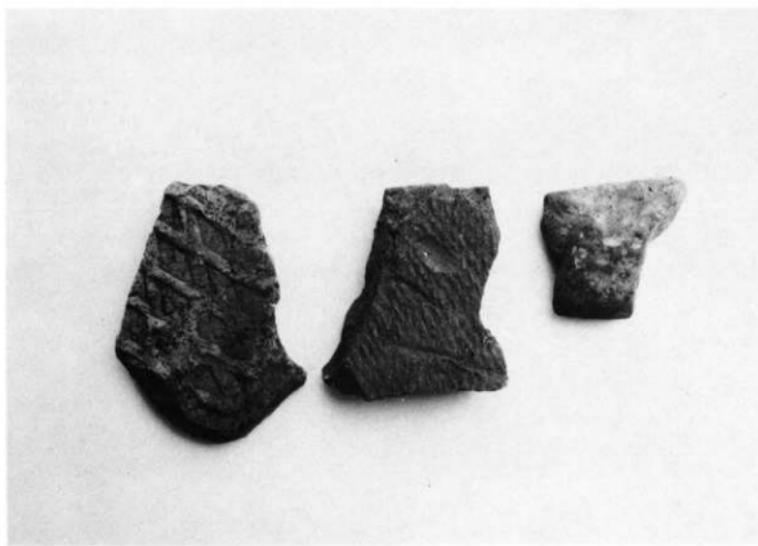
中・近世陶磁器外面



同内面

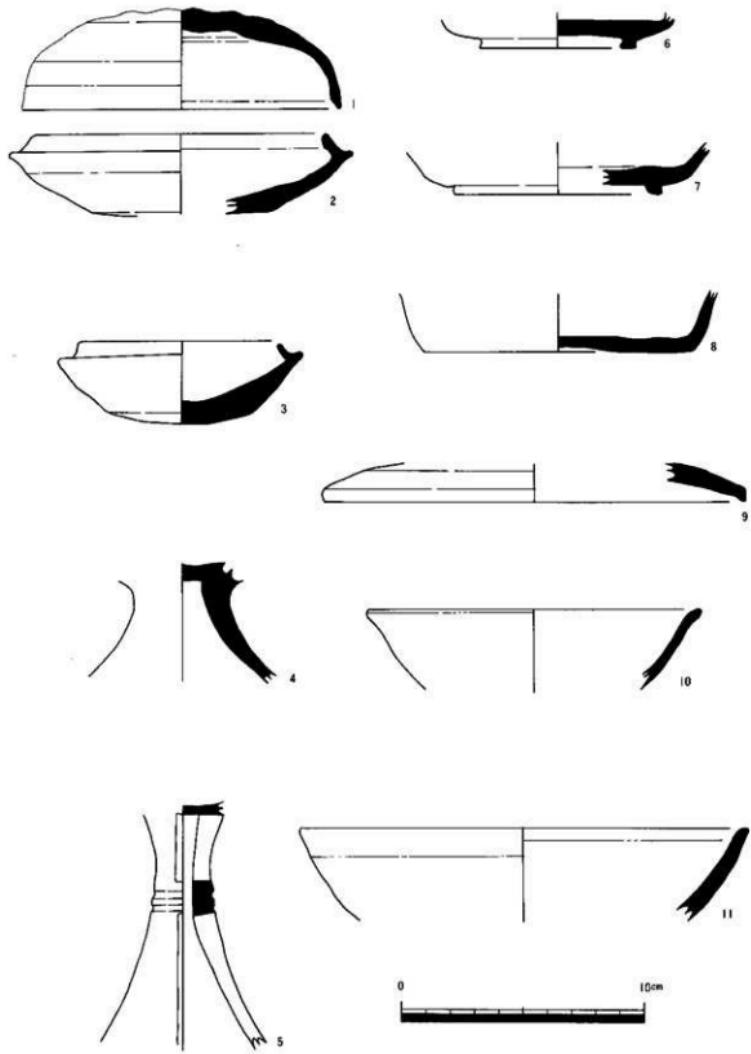


瓦表面

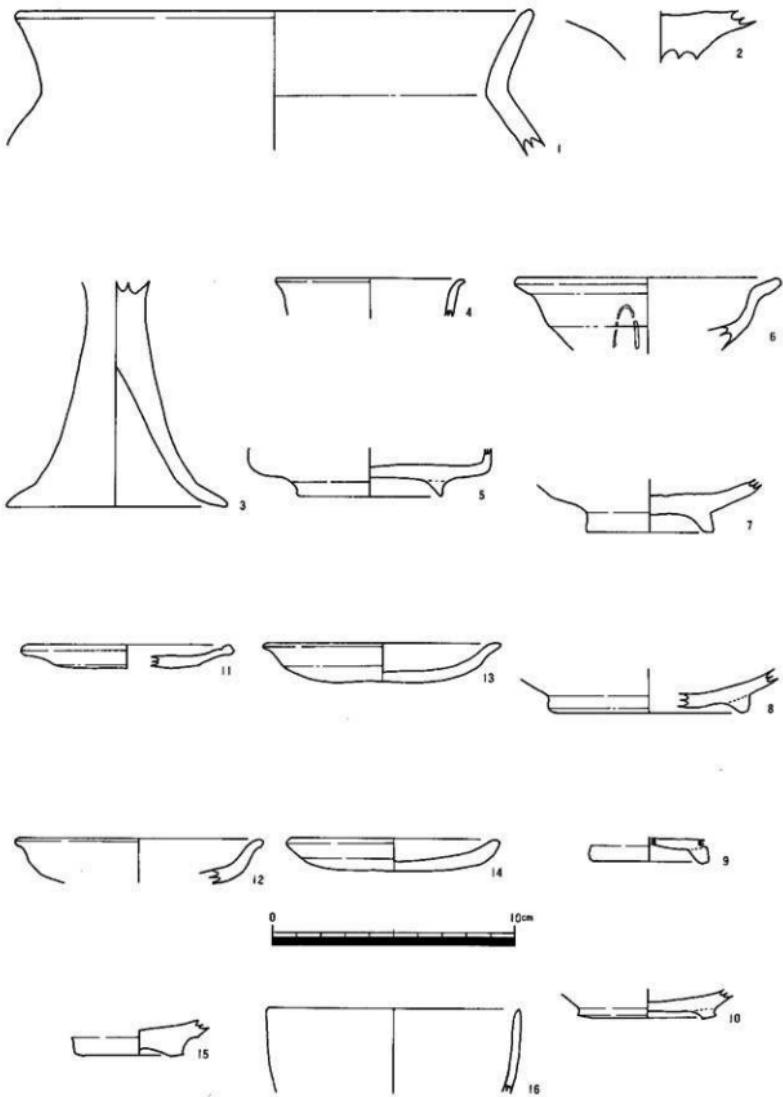


同裏面

図版一五 遺物実測図



圖版一六 遺物実測図



# 虫生遺跡 図版



東区（西より）



東区南端（北より）



北区中央（北より）



西区北端 Tr9.10

図版三 (E) Tr101断面 (F) Tr37断面

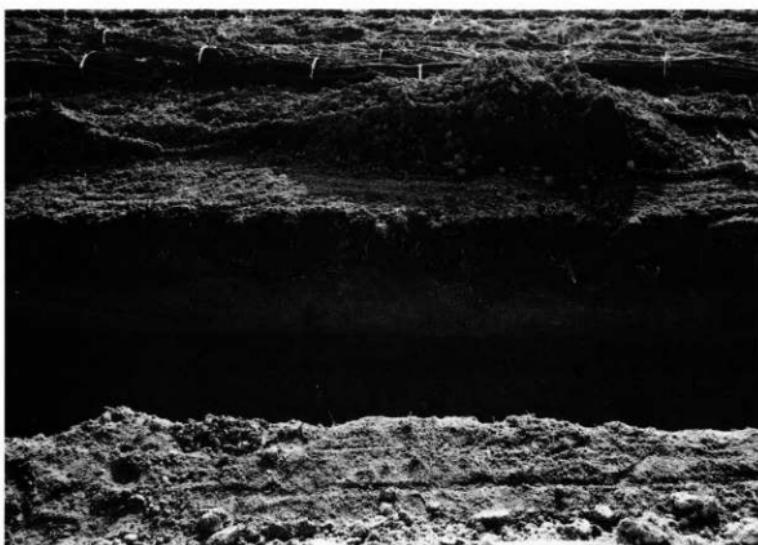


東区 Tr101



耕土下搅乱砂土検出 北区 Tr37

図版四 (上) Tr 46 断面 (下) Tr 50 断面



東区 Tr46



耕土下砂層・粘土検出 東区 Tr50



東区 Tr66



東区 Tr67

図版六 (上) Tr 86 断面 (下) Tr 98 断面



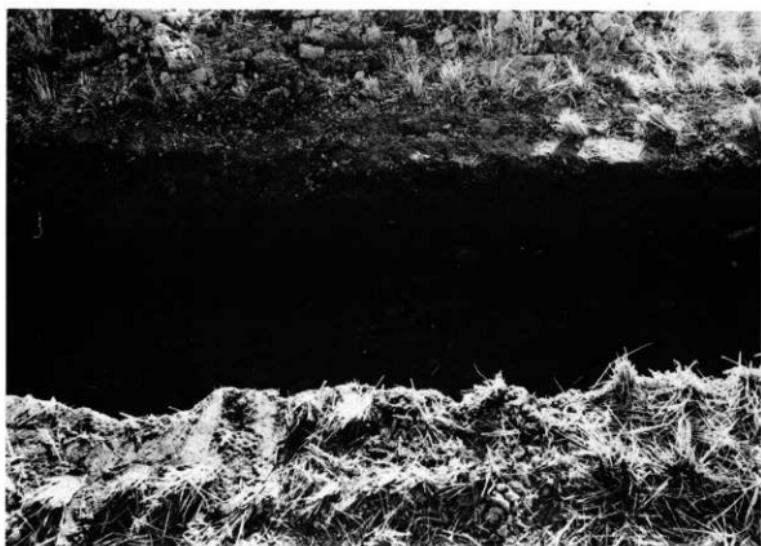
東区 Tr86



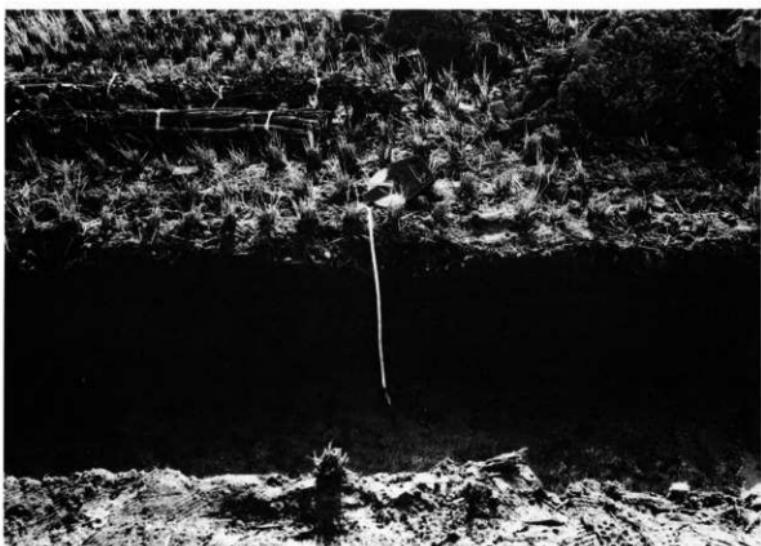
東区 Tr98

(上) Tr  
106  
断面

(下) Tr  
113  
断面



耕土下擾亂粘土検出 東区 Tr106



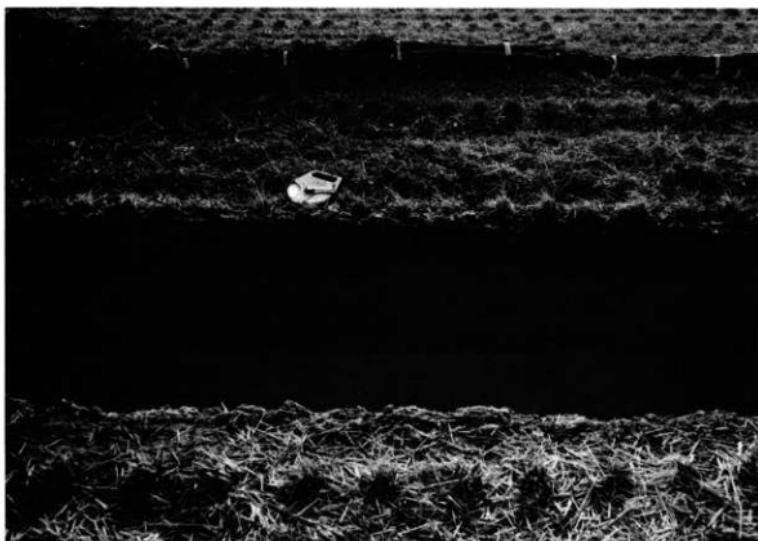
耕土下茶灰色粘質土層検出 東区 Tr113



黑灰色粘土層檢出 西區 Tr129



暗灰色粘土層檢出 西區 Tr138

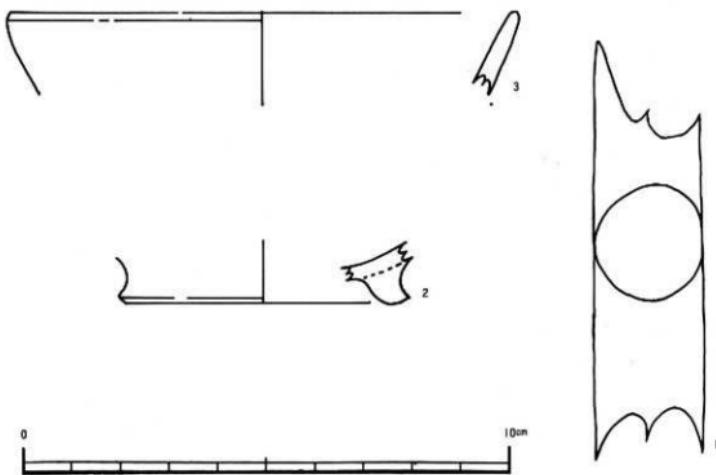


耕土下灰色粘土層 東區 Tr145



黑灰色粘土層檢出 西區 Tr165

図版一〇 遺物写真および実測図



遺物実測図

八夫遺跡 図版



西から



東から



人力掘削作業 Tr160



南西から



南端区(西から)

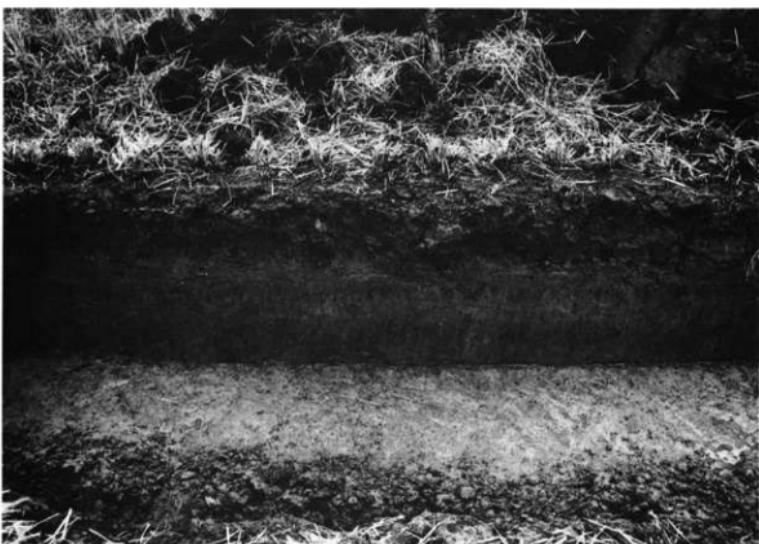


Tr116・117(東から)

圖版四  
(上) Tr 6 斷面  
(下) Tr 47 斷面



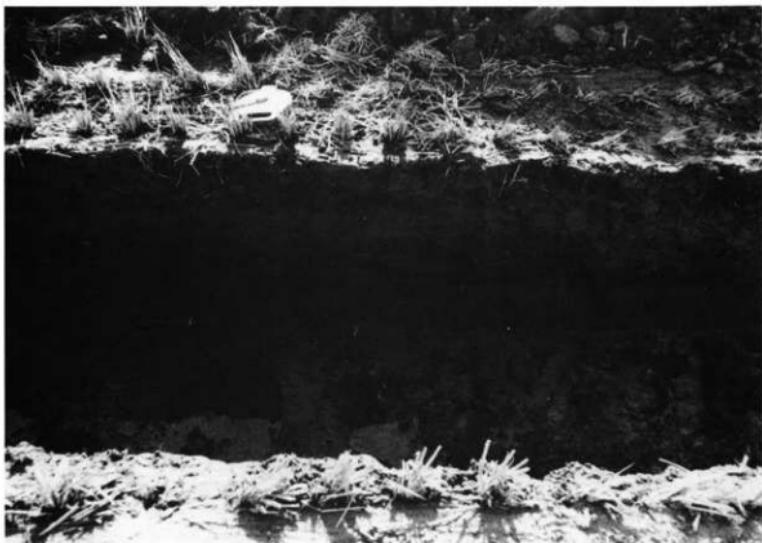
黑灰色粘土檢出斷面 Tr6



斷面清掃狀況 Tr47



黑色粘土層檢出斷面 Tr59



耕土下攪亂狀況 Tr104

圖版六  
(上)Tr108斷面  
(下)Tr115斷面



斷面清掃狀況 Tr108



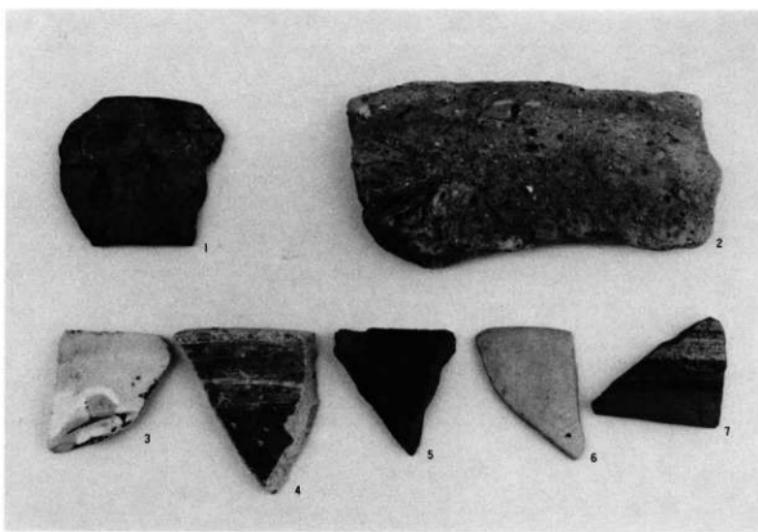
耕土下遺物包含層檢出斷面 Tr115



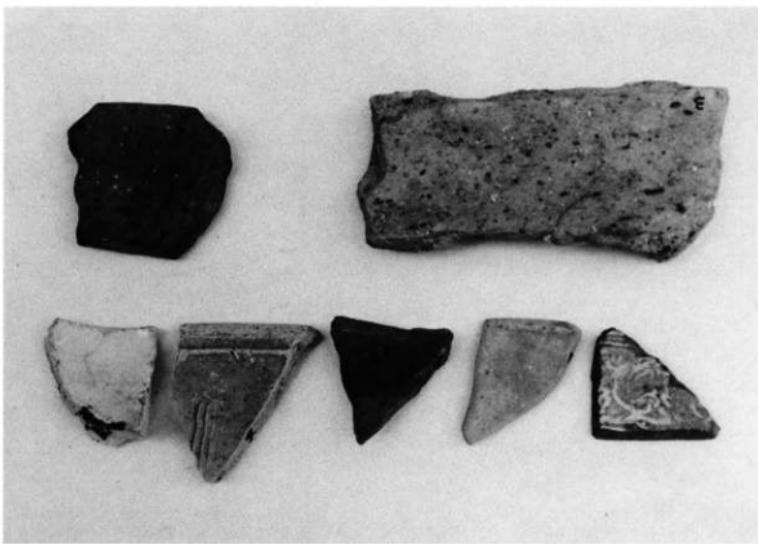
耕土下遺物包含層検出断面 Tr119



調査区近景(北東から) 後方は高木神社



陶磁器類等外面



同内面

昭和60年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XI-9

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会  
財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル  
TEL(075)351-6034